
IS インフィニット・ストラトス 無限の空へ

三朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 無限の空へ

【Nコード】

N7441Q

【作者名】

三朗

【あらすじ】

女性にしか扱えない飛行パワードスーツ『IS』インフィニット・ストラトス

双子の兄弟、織斑一夏と秋二は何故かISを動かせたためにとある学校に強制入学させられる。その学校は…なんと女子高だった!?

ハイスピードメカアクション×学園コメディ、開幕!!!

注意!この小説は『IS インフィニット・ストラトス』の二次創作です。嫌悪感を抱く方はご注意ください。

第一話 スタート！女だらけの学校生活！？（前書き）

どうも、狛ワンコと申します。就活中なのにやってしまった、でも後悔はしてないぜ！

初投稿なので生ぬるく見てやってください。うたれ弱い作者のためにも…。

では、本編どうぞ！

第一話 スタート！女だらけの学校生活！？

「はい。みなさん入学式お疲れさまでした。それじゃあSHR始シヨートホームルムめますよー」

黒板の前で小柄な体にゆったりした服を着たかわいらしい女性がほほ笑む。しかし、メガネで確認しづらいがその目は涙目だ。

「えと…このクラスの副担任、山田真耶やまたまです。い、一年間よろしく願いますね？」

「……………」

返答がない。時は春爛漫の四月、誰もが新しい出会いに胸躍らせるこの時期に似合わず、その教室は静まり返っていた。

「これは…想像以上にキツイ……………」

「まあ確かに。でも意識しすぎだよ」

その原因は中央の列に前から順に座る男子二名。双子の兄弟、織お斑りむ一夏いちかと秋二しゅうじに視線が注がれていることにある。

何を隠そうこのクラス…いやこの学校生徒は、彼ら以外全員女子なのだ。

第一話〈スタート！女だらけの学園生活！？〉

一夏と秋二は偶然にも『IS』^{アイエス}を操縦する素養を持っていたことで世界的な有名人になってしまった。

『IS』とは正式名称『インフィニット・ストラトス』という飛行パワードスーツである。

それは宇宙空間での活動を目的として開発されたマルチフォームスーツ。しかし『制作者』の意図に反して、その有り余るスペックから『兵器』に変わった。もつとも諸事情により今ではスポーツのような形に落ち着いている。が、現存するどんな兵器よりも強力な武装、比べ物にならない機動力、装着者を絶対に守る防御力。世紀の大発明に世界が魅了されたのは間違いない。

しかし、その世紀の大発明は致命的な欠陥を抱えていた。

この兵器は『女性』しか扱えない。

大前提であり大原則。それを覆し男が『IS』を動かした。このニュースは瞬く間に世界を駆け巡り、彼らの生活を一変させた。朝から晩まで自宅に詰めかける報道陣、世界各国の大使、挙げ句はいかがわしい研究機関まで。家の外に一步も出られない、しかもいつ何事あるかわからない。そんな状態から彼らを守るべく日本政府は『IS学園』に彼らを入学させたわけだ。

で、女性しか扱えないISのための学校。当然生徒は全員女子、職員の比率も女性がほとんど。そんな環境で二人が注目されるのは

もはや必然であった。

「織斑一夏くん？一夏くん！」

「ひゃいつ!?!」

呼びかけに一夏は素っ頓狂な声を上げた。

顔を上げると、山田先生が教卓から申し訳なさそうに一夏の顔を覗き込んできた。

「あのう、ゴメンね！自己紹介、『あ』から始まって今『お』で、お兄さんの一夏くんの番なんだよね。だから、自己紹介してくれるかな？ダメかな？」

お願いとばかりにペコペコと山田先生が頭を下げはじめる。女性に謝られ続けるとかなりバツが悪い。一夏はなだめる様に山田先生に話しかける。

「いや、そんなに謝らなくても……っっていうか自己紹介ちゃんしますから。ね？」

「あの〜ついでに俺もやっていいですか？一夏と一緒にの方がやりやすいんで」

「二人とも本当ですか？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

ガバつと顔を上げ、一夏と秋二に詰め寄る山田先生。大げさな人だな、と二人は思いつつ席を立ち、並んで前に出る。

「俺は織斑一夏。好きなものは風呂で家事全般が得意だ。特技は早寝、早起き、早着替え！」

「俺は織斑秋二。料理が好きでお菓子作りも得意です。ちなみにメガネかけてる方が弟の秋二って覚えといてね」

「みんなよろしく！」

バツチリハモってしつかり笑顔。二人の自己紹介に拍手が起こる。これでつかみがばつちりだ、と織斑兄弟は満足げに腰を下ろした。

「サンキュ、秋二。一人じゃ緊張でヤバかった」

「お互い様。俺も心臓バクバクだよ」

「ほう、SHR中におしゃべりとはいい度胸だな。織斑兄弟。」

一夏と秋二の頭に軽い衝撃が走る。顔を上げるとそこには黒のスーツにビシツと着こなす凛々しい女性が立っていた。

「「あ！千冬姉え……」」

「織斑先生だ。学校ではそう呼べ、馬鹿者ども」

かくて出席簿は振り下ろされる。頭を抱え悶絶する弟二人を余所に姉、織斑千冬おりむらちふゆは山田先生に目を向ける。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「いえ。副担任ですから、このくらいは。」

おどおどした言動はどこへやら、山田先生はしっかりした口調で千冬に応えている。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てる上げるのが仕事だ。私の言うことをよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

横暴な千冬の自己紹介にクラスは困惑する……かに見えた。

「キャ　　！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「千冬様にご指導いただけるとはなんて嬉しいです！」

教室を包む黄色い歓声。きゃあきゃあ騒ぐ女子の様子を見て織斑兄弟は啞然、茫然。職業不詳、月に一、二回しか帰ってこない自分たちの姉が教師、しかも歓声を浴びるほどの人だとは知らなかった。

「はあ……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

本当にうつつとうしそくに千冬が独白する。人気者はつらいよ、とはまさにこのことだろうか。しかし、そんな素っ気ない一言でも教

室はヒートアップする。

「ああん！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして〜！」

元気で何より。打ち合わせしてるんじゃないかと思っくらのタ
イミングでセリフがポンポン出てくる。

「そろそろ静かにしないか！授業を始めるぞ！」

鶴の一声。否、鬼教官の一喝。喧騒がぴたりとおさまり、クラス
全員が授業の準備を始めた。

優秀なIS操縦者の育成を目的としているこの学園では、時間割の
限界までIS関連教育をするために入学式当日から授業があるのだ。

「ISの基礎理論から始めるぞ。テキストの…」

こうして、IS学園で受ける初授業が始まった。

一時間目の休み時間。俺は机に突っ伏していた。

(これはまずい。ギブだ。ちんぷんかんぷんだ…)

授業の内容がさっぱり分からない。右を見ても左を見ても専門用語のオンパレード。予備知識0で分かるわけない。思考回路はショート寸前 なんつって。

「なあ、秋二。さっきの授業、理解できたか？」

「うーん、なんとか…。予習なしだったら相当ヤバかったかな」

「えっ!？」予想外の答えが返ってきた。「予習してきたのかよ? いつ?どこで?」

「いつどこでって…春休み中に家でだけど?」

「うわ、ずりー。教えるよ」

「ずるいって…教えなくつても一人で勉強出来たよ。テキストがあったら?」

「あつ。あー…あつたな、あれか…」

秋二の指摘に視線が泳いでしまう。確かにテキストは存在した。だが、だがしかしだ。そのテキストとやらが『あなたの街の電話帳がごとき厚さだったら読む気が失せる。もしかしたらマジで電話帳と間違えて捨てたかもしれないな。』

「まさか、なくした?」

「…うん」

「どうやったらなくすんだよ。織斑先生に言って再発行してもらい

なさい。必読って書いてあつたぞ」

呆れたように言う秋二。ああ千冬姉えにまた怒られる、とぼやいても我が弟は素知らぬ顔。自業自得というやつか。うーむ。

「…ちよつといいか」

「はい？」

二人は不意に声をかけられた。声の主は伸ばした黒髪をポニーテールにした女の子だ。整った顔立ち、少しばかりつり上がった目尻が凜とした雰囲気醸し出し、すらりと伸びた手足は平均的な身長 of 彼女を長身に見せている。可愛いというよりは綺麗、美人という賛辞がよく似合う。そんな女の子だ。

「一夏も秋二もはて？こんな美人の知り合いいただろうか、と小首を傾げた。」

（あれ？もしかして…？）

一夏は記憶をたどり、似た雰囲気 of 幼なじみを思い出した。

「もしかして…しのほり簾ノ之のほり簾か？」

「ええっ！？ほーちゃん！？」

「ああ、久しぶりだな。二人とも。それと秋二、お互いにいい年なのだから“ほーちゃん”はやめないか？」

「ごめん、篝ちゃん…」

そうやって秋二はまじまじと篝を見る。幼なじみがこれほどの美人になっているとは思わなんだ。

「どうかしたのか？」

「いやあ、ずいぶん変わったなあと思ってさ」

「ああ。綺麗になりすぎてわからなかったぜ」

「そっそうか？ありがとう…」

(うわ、素で口説きやがった)

秋二のつぶやきは二人には聞こえなかったらしい。ほめ言葉に篝は恥ずかしくなったのかわざとらしく咳払いを一つ。

「ゴホン。ま、まあ六年ぶりだ。無理もない。私も名前で気がついた訳だしな。二人は…秋二がメガネになったぐらいか？」

「えー、メガネ以外にもあると思うけどなあ。ま、一夏はそのまんまだけど」

「おい、成長してないみたいに言うなよ」

「ふふ。相変わらずだな、お前たちは。」

三人に笑みがこぼれる。

「ねえねえ、篠ノ之さんって二人の知り合いなの？」

いつの間にか三人を取り巻いていたクラスメイトに篤が話しかけられた。男子に直接話しかけるよりハードルが低いと判断したようだ。

「ん？ああ。この二人は幼なじみなんだ。家が近くてよく遊んでいた」

「あと、篤の家が剣術道場でさ。俺と秋二がそこに通ってて、その縁もあるな」

「へー。そうなんだ」

その娘の質問を皮切りに他のクラスメイトも質問を浴びせてきた。

「はい、じゃあ、次あたし！一夏君て何か趣味ある？」

「え？いきなり趣味って言われてもなあ…」

「秋二君、そのメガネって伊達？」

「二人のプロフィール教えて！」

「ねえ、ぶつちやけ、このクラスに好みのタイプっている？」

「いや、ちゃんと度は入ってるよ、ってそんないっぺんに聞かれて

も…」

「普段の織斑先生ってどんな感じ？」

「二人ともメアド交換しよ！」

「あ！ずるーい。私も私も！」

「早着替えってどのぐらい早いの？」

「お菓子作れるんだよね？今度食べたいなあ」

「千冬様みたいに罵ってください！」

「この馬鹿者！」

「って、ちよつと待て、最後のは質問じゃねえぞ！」「どさくさにまぎれてなに言ってるの！？」

怒涛の質問攻めに二人にあつぶあつぶ。十個の質問を一度に答えられるのは大昔の偉い人くらいだ。もちろんこの二人はそんなハイスペックではない。

「じゃあさ、ふたりは何でこの学園に入学できたの？」

ポンと投げかけられた問いにギクリ。一夏と秋二は固まった。そんな二人を見てわたわたと質問した女子は謝る。

「ご、ゴメンね。やっぱり聞かない方が良かったかな、ハハハ…」

「いやいや！そんなことないよ。けど…なあ秋二」

「ああ、かつこいい話じゃないんだよ。これがまた。それでもいい？」

「うん…」

「オツケー。それじゃあ、えっと…二月の半ばぐらいかな。ちょうど私立高校の受験の時期でさ、二人で同じ高校を受けることになってんだ」

「そこで偶然な…」

算含め他の女子も興味津々、二人の話に食いついてきた。

二月中旬。織斑兄弟は電車に揺られ、私立藍越学園あいえつの受験会場へ向かっていた。私立にも関わらず公立並の学費と卒業後の就職もしつかり面倒を見てくれる学校に、姉に迷惑をかけまいとする二人は即決即断で進路を定めた。そして、今日がその受験の当日。

「さつぷ。なんで一番近い高校の、その入試のために四駅も乗らなくちゃいけないんだ。」

「仕方ないよ。カンニングがどうのって話なんだろう？」

「まあな。」

先日わざわざ電話でカンニング騒動で試験会場が変更になったと

連絡があったのだ。

「市民ホールだったけ？会場」

「おう。あの『常識にとらわれない俺がっこいい』的デザインのな」

「無駄に入り組んでるから迷わないようにしないとね。建て替えの後ほとんどいってないし」

「だな。」

一夏と秋二はそんな会話をしながら電車を降り、件の市民ホールへ歩を進めた。

その三十分後。

「で、兄さん。試験会場はどこだい？」

「こっちって案内板が出てたたる。大丈夫だって怒らないでくれって」

青筋を浮かべた弟をなだめながら市民ホールの中をさまようこと三十分。一向に藍越学園の試験会場に行きつかない。二人そろって中三にもなって迷子。情けないことこの上ない。

「もう時間ギリギリだよ。もしかしてなにかの間違いじゃないの？藍越のアの字もないよ？」

「んなことない！電話でちゃんと“藍越学園”って言ってた！試験

会場はここだってすっかり、はつきり、言っていました！」

「ぐぬぬぬ……」

「はあ、やめよう秋二。不毛だ」

「そうだね……」

一通りいがみ合ったあと、兄弟そろってがつくり肩を落とした。秋二の言う通りもしかするともしかするのかもしれない。そんな不安に駆られたまま一夏は視線を動かす。そして、その目はある物を捉えた。

「あそこ！受験者控室って書いてある！」

「あ。ホントだ」

「あ、じゃねーよ！もたもたすんな。行くぞ！」

「ちよつと待てよ、一夏」

一夏は「受験者控室」の張り紙がしてある扉に駆け込み、秋二もそれ続いた。

「あー、君たち受験生？はい、じゃ向こうで着替えて。時間押してるから急いでね。」

「え？あ、ちよ」

「行っちゃった」

部屋に入るなり試験官と思しき女性が二人の顔も見ずに指示だけ出して、ぱっぱと出て行ってしまった。

「着替えてっ…何で？」

「カンニング対策じゃねえの？時間ないし、着替えちまおうぜ」

一夏はそう言って部屋の奥にある更衣室のカーテンを引いた。次の瞬間彼は目の前の物を見つめたまま動かなくなった。

「ん？どうしたの？」

ひょいと一夏の後ろから秋二は更衣室を覗くと、その中にあるものを見て驚愕した。

「何で」

「どっして」

「『IS』がここにあるんだ…」

「んで、どうせ動かせないんだから記念に触ってみようって話になって、二人で触ったらISが起動した訳だ」

「後は、みんなテレビとかで知ってるの通りの展開だね。それからち

よつと経つて、政府の人が君たちを保護するって言ってきた、IS 学園に入学させられたって話。」

一夏の話を受けて秋二はこれでお開きと手を広げた。

「なるほど。それにしても一夏、“藍越”と“IS”を聞き間違えた挙げ句、試験会場にまで行っても気づかないとは不注意もいい所だぞ?」

「それは、電話越しで相手の活舌も悪かったからであって…いつもなら、ないんだけどな…その、すみません」

双子の話聞き終えた幼なじみからは辛口なコメントが待っていた。

「うむ。篝ちゃんの言う通りだぞ一夏。なんでそんな妙な聞き間違えをするかな…」

「秋二も他人のことは言えんぞ。一夏がこんな性格なのは弟のお前がよく知っているじゃないか。確認を怠ったお前にも非がある。」

「はい、ごもつともです…」

双子はそろつてうなだれる。六年という溝は以外にも浅かったらしい。篝は昔同様に面倒を看はじめている。

「なんか二人って似てるね」

「「どこが?」」

しょげる二人を見て出てきたクラスメイトのコメントに思わず聞き返してしまった。

「顔はそっくりだからともかく。なんか雰囲気というか、印象っていうか。」

「そうか？あんまり秋二と似てるって言われないんだけど。なあ」

「うん。前に似てるようで似てないって言われたし」

「何を言うか。昔からお前たちは似たもの兄弟じゃないか。ほら、小三の遠足で…」

「待て、箒。それ以上は言うんじゃないぞ。あれは黒歴史だ」

「箒ちゃん。お願いだから古傷えぐるのだけはやめて。ね？」

二人は箒が続きを話す前に全力阻止。今さら小学生時代の失敗なんて話されたらたまらないのだ。そんな二人を見て箒はほくそ笑む。

「そうか。なら仕方ないな。ふうむ…それでは、お前たちが私の家に泊まりに来た時の話でもしよう」

「「箒さんマジ勘弁してください!!」」

そんなこんなで箒を含めた数名の女子たちの談話は先生が来るまで続けられた。

(よかった。箒もいるし、みんな仲良くなれそうだ。)

（大丈夫。こんな学校だけどなんとかやっていけそう。）

最初は女子校と聞くだけで疎外感と閉塞感を覚えていた二人は安堵していた。これならなんとかなる。クラスメイトもいい娘たちだ。そうトラブルも起きないだろう、と。

しかし、その考えは一時間後にもろくも崩れることになる。

「ちょっとよろしくて?」

気取った声が教室に響く。

第一話 スタート！女だらけの学校生活！？（後書き）

これからチマチマ投稿して行くのでよろしくお願いします。

感想、アドバイスを待っています！

誤字脱字や問題点等がありましたらお教えください。適宜修正します。

第二話 英国淑女、来襲（前書き）

お気に入り登録をしてくださった皆様、ありがとうございます！！

それでは第二話どうぞ。

第二話 英国淑女、来襲

二時間目の休み時間。幼なじみ三人組は再び集まっていた。

「篝ちゃんが転校した次の年に中国から転校生が来たんだ」

「それで？」

「……………」

「それで、転校初日に一夏と一緒にドタバタ騒ぎを起こしてさ。そのまんま意気投合。結局、中一の終わりまでつるんでたね。」

「ほう。会ってみたいな。一夏と肩を並べるくらいに元気なやつなんだろう?」

「そりゃあもう。会ったらびっくりするよ?口より先に手が出るタイプだから」

「……………」

篝は秋二に譲られた席に座り彼の思い出話に耳を傾けていた。で、話題にちよいちよい登場する一夏はと言つと…

「……………(ぱっしゅ・いんしゃーなんじゃこりゃ?)」

新しく用意されたぶ厚いテキストを読むのに必死だった。テキストをもらう際に姉から

「一週間で覚える。二度目はないぞ。」

とテキストトチョップも頂戴したことは全くの余談である。

(お。IS学園のことが書いてあるぞ…)

一夏はこの『IS学園』のページをパラパラとめくる。

IS操縦者育成のために最高の設備と環境を整えた国立高等学校で、教職員のレベルも最高クラス。海外からの留学生の幅も広い。そして様々な特権を持った国家の枠にとられない超法規的な教育機関。その資金繰りや運営をすべて日本がやらされているあたりに日本の立場が現れていたりもするわけだが。

「どうしたんだ、一夏？」

「んー。なんかすごい学校に来たんだなって、改めてな」

「まあね。条約でいろいろ決められているだけはあるよ」

「条約？」

「…テキストの231ページを開くんだ」

一夏は言われたとおりにページを開く。そこには『IS運用協定通称“アラスカ条約”』が載っていた。協定国やそれぞれの国に割り振られたISの数、その運用、研究、取引、情報の取り扱いに至るありとあらゆるISの規定がびっしりと。IS学園もこの協定に基づいて設置されたものだと書いてある。

「うわ、無理。こんなの全部覚えきれない。」

「全部でなくていい。必要なところをちゃんと覚えるんだ。ISはその条文に則って運用される。把握しておかないと後で苦労するぞ」
「了解です…」

篝の指摘はごもつとも。一夏は再びテキストに視線を戻す。ただでさえ知識不足なのだ。基本事項だけでも覚えなくては、とページをめくる。だが、その続きはかなわなかった。

「ちよつとよろしくて？」

気取った声が教室に響く。

第二話 英国淑女、来襲

「はい？」
「なんだ？」

俺たち三人はおもむろに話しかけられた。

話しかけてきた相手は、金髪碧眼と白磁の肌が麗しい女の子。わずかにロールした髪や腰にあてられた手、立ち振る舞い一つ一つに高貴さがにじんでいる。

今の世の中、世界最強の軍事力であるISを動かせる女性が優遇されている。社会全体に差別とまでいかなくとも女尊男卑な傾向がある訳だ。で、目の前の女の子はいかにもそんな感じの『今の女性』といった雰囲気だ。

「なんです、そのお返事は？聞いていらっしやいます？」

「ああ、ゴメンね。どうしたのオルコットさん。なにか御用？」

流石は我が弟だ。高飛車な物言いの相手にも物腰柔らかに対応している。俺は正直この手の女性が苦手だ。幕もどうやら同じらしい。無然とした感じになってる。

ISは強い。だからそれを使える女性は強い。でもその強さを横暴に振りかざせば、それは間違いなく暴力だ。

「まったく、弟さんはよくできていらっしやいますのに…あなたたちの態度はなんですか？」

「悪かったな。秋二よりも出来が悪くて」

「目つきと態度が悪いのは生まれつきだ」

「まあ！イギリス代表候補生にして主席入学のこのわたくし、セシリア・オルコットが相手ですよ？態度を改めるべきではなくて？」

「それはお互い様だ。オルコット」

睨みにひるんでるぞ、もっと言ってやれ篤。だいひょーこーほせーってやつはそんなに偉いのか　って、ん？

「なあ、一つ質問いいか？」

「ふん。下々の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ。」

「だいひょーこーほせーって、なんだ？」

ガタタツ！！俺の質問に何人かのクラスメイトがずっこけた。なぜに？オルコットは信じられないって顔でフリーズしてるし、秋二と篤は呆れてるし。

「あー…一夏。その国を代表してISを操縦する者を“国家代表”と呼ぶ。その候補の学生だから“代表候補生”だ」

「イメージとしてはオリンピックの代表と国の強化指定選手みたいなもんだよ。」

「ああ。なるほど」

わかりやすい篤と秋二の説明に思わずポンと手を打ってしまった。

「じゃあ、オルコットは結構エリートなんだな」

「そう、エリートなのですわー！」

あ、復活した。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすること自体が幸運ですよ。大体、ISについてまるで知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。ISを扱える男性と言うことで期待していましたのに。とんだ期待外れですわ」

「いや…。俺に何かを期待されても困るんだが」

「ふん。まあでも？わたくし優秀ですから、ISについて分からない事があれば、まあ…泣いて頼まれたら教え差し上げててもよかったですよ。何せわたくし、唯一入試で教官を倒したエリート中のエリートですから」

「俺たちも倒したぜ。なあ？」

「なあ…って、あれはまぐれだろ」

確かにまぐれだ。二人して避けたら教官自ら壁にぶつかったんだよな。しかし弟よ、まぐれで自滅だろうが勝ちも勝ちだ。

「…わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「女子ではっていうオチじゃないのか？」

「あなたたちも教官に勝ったって言うの！？」

「ちよつ。オルコットさん。落ち着いて」

「これが落ち着いていられますか！？」

秋二の言う通りだ、落ち着けオルコット。興奮しすぎると脳の血管によるしくないんだぞ。

キーンコーンカーンコーン

「ッ！お話の続きはまた改めて！」

予鈴を聞いてオルコットは俺たちを指さしてから席に戻っていった。また来るのか勘弁してくれ。

「…篝ちゃん。とりあえず席に戻ろうか」

「…ああ」

秋二に促されて篝は自分の席に戻っていく。盛大にため息をつく弟。

「なんで相手を逆なでするかな…」

「なんか、まずいこと言ったか？」

「言ったよ！」

「す、すまん」

「いつまで喋っているつもりだ。お前たち」

出席簿の小気味いい音で俺たちの会話は終了した。

俺と一夏は叩かれた頭をさすりながら前を向いた。

「授業の前に再来週行われるクラス対抗戦に出場する代表者を決めるぞ」

教壇に立った千冬姉さんが口を開く。

「対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会への出席もしてもらう。まあクラス長のようなものだ。決まったら一年間変更はなしだ。自薦他薦は問わないぞ。誰かいないか？」

要するに戦う学級委員長か。学級委員の仕事はともかく、戦うのは勘弁だな。痛いのは嫌いだし。

「はい！私は織斑一夏君がいいと思います！」

「じゃあ、あたしは秋二君を推薦します」

私も私もと俺と一夏を推薦していくクラスメイトたち。人気投票じゃないんだから…。

「ちょ、ちょっと待った秋二はともかく俺はそんなの」

「自薦他薦は問わないと言った。推薦された者に拒否権はない」

立ち上がって抗議する一夏をにべもなくバツサリ。さすが姉さん。

もう何を言っても辞退できそうにないな。さて、どうやって一夏に押し付けよう。

「他にいないなら織斑兄弟で決選投票を」

「納得いきませんわ！」

バン！と机をたたいて立ち上がったのは、あのセシリア・オルコツトさんだ。

「そのような選出は認められません！大体男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！このわたくしにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！」

うわ、恥に屈辱とまでおっしゃいますか。でも、とりあえず気持ちを納めてください。怒るやつがいますから。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

うわあい。俺の願いもむなしくオルコツトさんの勢いは止まらない。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはならないこと自体、わたくしにとって耐えがたい苦痛で」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

「こら！おまえ何言って」

「おいしい料理はたくさんありますわ！あなた、わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「そっちが先に言ってきたんだろ？」

それみたことか。こうなったらもう売り言葉に買い言葉だ。

「ならば、決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言つより分かりやすい」

「そうですね…二人と一緒に相手して差し上げます。このわたくしが素人に遅れを取るはずがありませんもの」

「いや、二対一って…」

「やってやるっぜ、秋二。向こうが売ってきた喧嘩だ」

「だから、二対一はまずいだろ。怪我させちゃったらどうすんだよ？」

「あ。そっか。じゃあオルコット、ハンデはどのぐらいつける？」

俺たちの言葉を聞いてクラスからドツと大爆笑が起こった。

クラスのみんなが大爆笑。ギャグがウケたならいい。でもこれは違う。

「ふ、二人ともそれ本気？」

「男が女より強かったのって、ISができる前の話だよ？」

「男と女が戦争をしたら3日持たないって言われてるよ？」

笑ってないのは筈だけ。みんな本気で笑ってるよ。青筋立てて怒っていたオルコットまで嘲笑^{わら}ってやがる。

「むしろ、わたくしがハンデをつけなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ。日本の男子はジョークセンスがあるのね？」

今の世の中、男は立場も力も圧倒的に弱い。だからどうした？それがなんだ？強い弱い男・女じゃ計れない。俺が信じる強い人はそんなこと関係なかった。だったらやってやるうじゃないか。

「…じゃあ、ハンデはいい」

俺はオルコットを見据えた。

「ええ。それは舐め過ぎだよ。今からでも遅くないって。ハンデもらいなよ」

男が女よりうんぬんと言っていた女子は話しかけてきた。その顔には失笑が浮かんでいる。これにはカチンと来たぞ。

「男が言ったことを覆せるか。なくていい」

「でも一夏。二対一なら俺はやらないよ。」

心底嫌そうに言ってくる秋二。「ここにきて何を言つかお前。ほら、オルコットが調子に乗るぞ。」

「あら、怖気づいてしまったのかしら？お二人が相手でもわたくし」

「違うね。決闘は二対一でやるものだ。このままじゃ子どもの喧嘩だよ。まさか、英国淑女であるあなたが“決闘”の意味を理解していないのかい？」

「ぐっ…」

秋二に正論を言われてオルコットは黙った。口喧嘩じゃコイツに敵わないぞ。俺も勝ったことないし。

「織斑弟がそこまで言うならトーナメントにすればいい。優勝者がクラス代表でどうだ？」

もめている俺たちに織斑先生が提案をしてきた。あ、それは妙案だ。俺と秋二は顔を見合わせ、それでいいと先生に首肯を返した。

「仕方ありませんわね…」

オルコットは渋々了解。これで決まりだな。

「よし。勝負は一週間後の月曜。第三アリーナで行う。組み合わせは当日だ。織斑兄弟とオルコットは各自用意をしておくように。それでは授業に移るぞ」

パンツと手を打って千冬姉えが話を締める。立っていた俺たち三人はそれぞれ席に着いた。なんか大変なことになっちまったけど、やるからには全力で、そして勝つ。

俺が信じてる強さ。見せてやるよ、ブリテイッシュ・レディ英国淑女！

第二話 英国淑女、来襲（後書き）

セシリアさん登場&対決フラグ建設の回でした。
第3話は織斑兄弟と仲良しさんです。

非ハーレムにするべくプロットを作っているんですが、フラグの多さに泣いてます。これがハーレム主人公の力か…。どうやってフラグクラッシュしよう。セシリアさんがマジで鬼門です。

あと、似ている名前の方を見かけたので、ユーザー名を変更しました。
これからは“三朗”と名乗っていきますので、よろしくお願ひします。

追記：ごめんなさい大幅修正しました。

第三話 学生寮、ここも当然以下省略（前書き）

第二話の終盤部分を大幅に変更しました。

投稿してすぐに見て下さった皆様ごめんなさい。

では、第三話どうぞ

第三話 学生寮、ここも当然以下省略

セシリア・オルコットの挑戦を受けたその日。その放課後。俺たちは学生寮の玄関先にいた。

「兄さん…ここは学生寮だよな？」

「ああ。そつだ。弟よ」

「ここには女子しかいないんだよな？」

「弟よ。あきらめろ」

がつくりとうなだれる弟。その肩を慰めるよう叩く俺。

このIS学園は全寮制。そして女子校。弟よ、言いたいことは言わずともわかる。目の前にそびえる寮には女子しかいないのだ。

「クラスならともかく、いきなり女子と寮で共同生活なんて…」

「さっき言われたんだから仕方ないだろ」

「これで女子と相部屋は勘弁…」

「何ブツブツ言ってるんだ！さっさと行くぞ。日が暮れちまう」

いやいや言う秋二の首根っこをつかんで俺は女が住む城メゾンもとい、一年生用学生寮へと踏み入れるのであった。

第三話〜学生寮、ここも当然以下省略〜

遡ること三十分前。

俺と秋二は教室で簿と別れた後、山田先生に呼び出されて職員室に来ていた。

「なんすか？山田先生、俺たちに用事って」

「えつとですな…二人の寮の部屋が決まりました」

そう言つて山田先生は部屋番の書かれたメモと鍵を手渡してくる。

「自宅通学って言われたんですけど？」

秋二は疑問を口にする。ややあつて山田先生は口を開いた。

「政府からの要請で急遽、部屋割を変更したんです。二人の場合は事情が事情なので。その辺のこと、何か聞いていませんか？」

いいえ、まったく、と俺たちは首を振る。それにしても急すぎるだろ。今日って。

「そうですか…とりあえず、当面は別々の部屋で、しばらくしたら二人の部屋を用意できると思います。それまでちょっと我慢してください」

別々の部屋と言われて手渡されたメモをあけてみる。俺は1025号室で秋二は1130号室か。

「わかりました。でも、俺たち私物とか着替えとかないっすよ?」

「それなら大丈夫だ。もう手配してある。着替えと携帯の充電器ぐらいあればいいだろう?」

この声は千冬姉えだ。こっちに歩いてくる。BGMはダースベーターかターミネーターだな、絶対に。

「えー、そんだけ…」

千冬姉え、日々の生活には潤いも必要なんだぜ?

「あの、織斑先生、ちょっといいですか」

「ん、何だ?」

言葉少なになっていた秋二が口を開いた。

「この寮ってもしかしなくても」

「女子寮だ」

「やっぱり…！女子寮に男子を放りこむ気！？問題ありすぎだよ！」

「仕方ないだろう。今、家に帰ったらどうなると思っっている？」

「どっつて…」

「拉致、恐喝…何かしらの犯罪に巻き込まれる可能性がある。人が毎日のように来ているんだろう。どさくさにまぎれて、なんてこともあり得る」

千冬姉えにそこまで言われて秋二は黙った。千冬姉えの言ってることは正しい。確かに妙な奴らもいたからな。君たちの生体を研究させてくれ、とか。やらせるか馬鹿。

「まあ、姉としては目の届くところにいてくれると安心なんだがな」

「…わかったよ、姉さん」

それ言われたら敵わないんだけど、千冬姉え。納得した秋二を見て山田先生が俺たちに寮の規則を説明してくれた。

「…と大まかにはこのくらいです。時間を見て寮に行ってくださいね。あと、二人は大浴場を使えません。部屋のシャワーを使ってください」

「え、なんでっすか？」

でかい風呂大好きなのに。

「アホかお前は。女子と風呂に入るつもりか」

「いえ、滅相もございません」

そりゃそうだ。女子しかいないのに男が大浴場に乗り込むわけに
いかない。

「それじゃ、これから職員会議があるので、これで」

「はい、失礼します」

俺たちは職員室を後にし、一年生の寮へ向かった。

只今、俺たちは女の城ダンジョンを絶賛攻略中だ。食堂、売店、談話室、と
りあえず大浴場、トイレ 男が入れる職員用、一通りの場所は把
握できたな。さて、それじゃ部屋に向かうか。

「えーと1025、1025…お、あつたあつた」

「俺は1130だから上の階だな。んじゃ、着替えたら食堂で」

「わかった、また後で」

そこで秋二と別れ、俺は目の前の扉を開けた。

「おお…」

部屋の中はかなりすごかった。言われなければホテルと勘違いするぐらいのレヴェルだ。二つ並んだベッドはふかふかしてそうだし、勉強用のデスクに、ミニキッチンまである。充実しているな。とりあえず、荷物を置いて。よし！ベッドにダイブ…

「誰かいるのか？」

ってあれ？誰かいる？そうだシャワールームがあるって山田先生言ってたっけ。

ガチャ

あ、まずい。これは嫌な予感しかしない。

「ああ、同室になった者が。これから一年間よろしく頼むぞ」

この声はまさか。まさかな。

「こんな恰好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之ほつ…き…」

「よ、よう籌…」

しまった、ボスはここにいたか。目の前に本日再会を果たした幼なじみが現れた。しかも、風呂上がりを象徴するバスタオル一枚を

体に巻いただけの格好で。ポニーテールじゃないのも新鮮だな。

タオル一枚のお陰で出るところは出て、引つ込むところは引つ込んだ、俗に言うボンツキュッボン…は死語か、訂正、女性らしいボデイラインがあらわになっている。隠れ上手なへビ風に言つと、いいスタイルだ。

「……………」

固まった。あれだ。有名なセリフがあつたな。えっと、時よ止まれ…じゃなくて、そして時は動き出す、だ。思い出した。

「…いい、い、いちか…」

「お、おう…」

俺の返事にボンと効果音付きで赤くなる筈。

「ツ!?み、見るな！」

「わ、悪い！」

即座に回れ右。いかん、なまじいいスタイルが故に見とれてしまった。

「な、な、なぜ、お前が、ここに、いる……………?」

「いや、なんでって、先生に部屋はここ」

一瞬。筈は俺の横を駆け抜ける。そこから立てかけてあつた木刀を手に、真つ向から唐竹割りを仕掛けてきやがった。

「うおい！」

何とかかわしてドアへとダッシュ。バン！と扉を閉めて胸をなでおろす。

「助か」

ズドン！

ってませんでした。顔の真横を木刀の切っ先がかすめる。箒のやつ木製のドアを突きでぶち抜いてきやがった！ズズズ…と木刀が引っ込んでいく。今度こそ助かつ

ズドン！ズドン！ズドン！

よける！よける！よける！

俺は背後からの猛攻を全て回避し、廊下にへたり込んだ。

「危ないだろ！今の避けてなかったら死んでるぞ！」

「……」

部屋の主に抗議しても返答がない。騒ぎを聞きつけて他の部屋から女子が集まってきた。しかも、寝間着、部屋着と言う相当ラフな格好で。

「なになに？」

「あつ。一夏君だ」

「えー、あそこって一夏君の部屋なんだ。いい情報ゲット〜！」

いかん。これはまずい。何人かはズボンはいてないじゃないか！
ブラウスから胸元が見えている子もいるし！

「箒さん、お願いします。部屋に入れてください。色々とまずいので。と言つか謝るので。すみませんでした、この通りっす！」

扉に向かって土下座。頼む。入れてくれ。

「何？どうしたの？」

「あ、秋二君」

「一夏君の部屋で何かあったらしいよ」

ああ、よかった。秋二が来てくれた。女子の間を縫って秋二は俺の前までやってきた。

「…何やってんの、一夏」

扉に土下座をしている格好の俺はさぞ珍妙に見えることだろう。
だが今は関係ない。

「秋二、お前も謝ってくれ！箒が中に入れてくれないんだ。早く！」

「？」

「いいか、周りを見る。このままだと色々まずいだろ？」

「…あ。みんな部屋から出るときは上着を着た方がいいよ。まだ冷える日もあるからね」

「「「はい」」」

につこりスマイルでやんわり注意する秋二。紳士だ。確かにそう
だ。

「つて、そうじゃないだろ！何でみんな返事するのさ！」

ギィィ…。俺たちの目の前でゆっくりと扉が開いた。

「…入れ」

ドアを開けた筈は寝間着用の浴衣に着替っていた。どうやら着替え
たらしい。

「おまえ前な」

「なんで…」

俺はぐいぐいと秋二の背中を押して部屋に入る。何かあったらコ
イツを盾…ゲフンゲフン。
部屋の中に入ると筈が窓側のベッドに座っていた。あ、そっち側狙
ってたのに…。

「お前が、私の同居人だと言うのか。」

「お、おう。そう、らしいぞ」

開口一番。篤はそう言っつてこっち睨んできた。たまらず秋二の後ろに隠れる。弟の後ろに隠れるなんて情けないって？なんとでも言え俺は命が惜しい。

「どづいつつもりだ」

「へ？」

「どづいつつもりだと聞いているっ！男女七歳しちさいにして同衾どうきんせず！常識だ！」

「いつの時代の常識だよ。それ」

でも十五の男女が相部屋っつていうのは問題ありまくりだ。

「ねえ。二人ともどうしたの？何があったのか分かんないんだけど…」

俺と篤の様子を見て秋二は困惑気味だ。仕方ない。俺は事のあらましを説明…という名の言い訳をした。

「それじゃなに？シャワー上がりにはバツタリで喧嘩？」

「まあ、そつなるな」

俺の言葉を受けて秋二がため息をついた。

「どこのラブコメディだよ…」

「途中からコメディじゃなかったけどな！」

危うく殺人現場になるところだったわ！よくあるおいしい展開、
なんてホントはおいしくない。怒りを買うだけだ。現にひどい目に
あった。

「お、お、お…」

「「お？」」

「お前から希望したのか……？私の部屋にしろと…」

「んな馬鹿な」

誰が女子と相部屋にしてくださいって頼むか。あり得ない。箒は
そんな俺の返答がお気に召さなかったらしい。俺 秋二の後ろに
いる へ向かって木刀を振りおろしてきた。

「ひいつ!?!」

で、当然木刀を受け止めるのは秋二なわけで。すげーコイツ白刃
取りしたよ。

「馬鹿…馬鹿だと？そうかそうか…」

「箒ちゃん？落ち着いて？それと言ったのは俺じゃないから…」

秋二に言われて箒は木刀をひっこめた。助かった。

「まったく、なんでお前たち兄弟が相部屋ではないのだ！」

「俺だって知るかよ」

俺たち兄弟が別々の部屋にされる理由なんて知るわけない。こっちが聞きたいぐらいだ。

「あー、それは俺の部屋のせいかな……」

「「？」」

頬を掻く秋二に俺と篤は揃って首をかしげる。

「まあ。来てみればわかるよ」

俺たちは秋二の後について自分の部屋を後にした。どんな部屋なんだろう？コイツが一人部屋だったら先生に抗議しよう。うん、そうしよう。

「「……………」」

俺と篤は絶句した。案内された秋二の部屋は数多のダンボール箱が詰められていた。うずたかく積まれた箱。本来二人部屋であるそこはベッド一つ以外の生活スペースはほとんどない。リフォームの匠も真っ青だ。

「山田先生よると、寮の倉庫に消耗品が入りきらなくなっちゃって、空き部屋なっていたここを一時的な保管場所に使ってたんだってさ。そこへ俺たちが来ちゃったから……」

急な入学、急な入寮。空き部屋は1130号室しかない。そこには先客が陣取っている。そこで女子部屋となんとかスペースを空けた1130号室に強引にねじ込んだとのこと。

「数が減ってきたら片付けだって。それまでは一夏と篝ちゃんは相部屋だね」

「片付くまでどのぐらいかかるんだ、これ？」

「ほとんどポディソープとかシャンプーの類だし……結構な量だから二ヶ月、場合によってはもっとかかるかな？」

「その……秋二。居心地が悪かったら私の部屋に来るんだぞ。私は気にしないからな」

「ありがとう。大丈夫……だと思う、多分」

「……」

篝、その優しさを俺にも分けてくれ。秋二の部屋には何も言うまい。俺たち兄弟が別々という時は決まって弟が貧乏くじを引く。今回もまさにそれだ。俺も今回は当たりでハズレだが。

「とにかく。俺が我慢すればいいんだし、住めば都ってね。さ、ご飯行こう。食堂終わっちゃおうよ」

この話はこれで終わり、と俺たちは秋二に促されるまま食堂へ向かった。秋二が倉庫のような部屋で我慢するなら俺も相部屋くらい我慢しよう。まあ、お互いにまったく知らない訳じゃないんだ、筈と相部屋でもなんとかなるだろ。

結論　なんとかありませんでした。

夕飯後、秋二と別れ部屋に戻ったところで筈から提案があった。それは共同生活をする上でのルールを決めようというもの。必要なことだ、と快諾したのだが…

「なあ、シャワー先に使わせてくれよ。頼む」

「私に部活後そのままでいると言うのか!？」

「剣道部だっけ?それなら部活棟にシャワーあるだろ?」

「わ、私は自分の部屋でないと落ち着かないのだ!」

シャワーの順番で揉めに揉めていた。

「こつちだつて大浴場が使えるば、こんなわがまま言わないさ」

「なんだ、風呂に入りたくてもいうのか?」

「ああ、入りたいね。大浴場だって使いたい」

風呂好きとしてはシャワーだけでは物足りない。でかい風呂があるのに入れない。これでは生殺しもいい所だ。

「しばらく見ないうちに変態趣味に走ったか…見損なったぞ！」

「はあ！？なんでそうなるんだよ」

「当たり前だろう！女と風呂に入りたいなど、変態趣味以外の何がある！ええいつ、ここで成敗してくれる！」

「つと、されてたまるか！」

木刀を持ちだしてきた箒に応戦すべく俺は武器を探す。部屋の端に置いてあるポストンバックに突き刺さった竹刀を見つけた。

（これだ！）

それをひつつかむとバックから強引に引き抜いて、中段に構える。

「ああああっ！？」

どうした筈、そんなに慌てて？はて、竹刀とは先端にひらひらした布をつけた物だったろうか？それをつまんでみるとその正体はすぐに分かった。

（あ。なんだ。ブラジャーか）

家で姉の下着を散々見てきたし、洗濯してたたむまでやってきた

のだ。今更こんなもので恥ずかしくなるほど初心じゃない。だが、
箒は違ったらしい。

「みつ、みつ見るな！！返せ！！」

超速でそれを竹刀からはぎ取り、自分の両手で覆い隠した。

「ああ、そのブラジャーお前のだったんだ？」

「だったらなんだ！」

「いや、なんとというか…成長したんだなあ、と…」

いかにいかに、視線が箒の胸元に行ってしまった。

「っ！この変態がっ！どこに目をつけている！！」

「顔のここだよ！それから変態変態っていうな！！」

「なら助平すけへえだ！」

「何を！」

ぎゃいぎゃい口論する俺と箒。こうしてIS学園一年生寮の夜は
更けていく。俺と秋二の長い入学初日はドタバタ騒ぎで幕を下ろし
た。

第三話 学生寮、ここも当然以下省略（後書き）

一夏のラッキースケベな回。秋二君は哀れダンボール部屋へ。

ほぼ原作通り。でも一夏が若干スケベ？な感じですよ。

ではまた次回！

第四話 特訓開始（前書き）

アニメ8話でパイルバンカー登場…胸が熱くなるぜ

で、こっちは第四話です。どうぞ。

第四話 特訓開始

おはようございます。織斑秋二です。今、俺は一夏と篝ちゃんと一緒に朝ご飯を食べています。

「なあ、謝るから機嫌直してくれよ」

「だから怒っていないと言っている」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

食べているのですが…

「あの、篝」

「な、名前で呼ぶなっ」

「…篠ノ之さん」

「……………」

篝ちゃんがすごく不機嫌です。怒ってます。

「一夏、お前何やったんだよ」

「…言えない。というか言いたくない」

聞いてみてもこの調子。夕飯の後に一悶着あったんだろうなあ。大方、一夏のせいだ。

どうしようかと考えていると耳慣れたよく通る声が食堂に響いた。

「いつまで食べている！食事は効率よく迅速に取れ！一年の寮長はこの私だ。遅刻した者はグラウンド十周させるぞ！」

姉さんて寮長なんだ。そうか、だから月に一、二回しか帰ってこなかったんだ。一人で納得していると周りのみんなは大急ぎで朝食を食べている。ES学園のグラウンドは一周5キロ。朝からフルマラソン以上の距離を走りたくないよね。どの道、走ったら遅刻もなにも関係ない気がするけど…。

「箸が止まっているぞ。さっさと食べる」

「了解です…」

拳固めないでください、姉さん。

第四話〈特訓開始〉

俺と秋二と篤、他数名のクラスメイトが予鈴ギリギリに教室に滑り込んで着席。なんとか遅刻せずに間に合った。千冬姉え、朝食くらいゆっくり食べさせてほしい。

「授業の前に連絡事項だ。織斑兄弟。政府からお前たちに専用機が用意されることになった。お前たちのデータと新装備のデータ、その両方を同時に収集するそうだ。手続きの関係で届くのは来週になる」

なんですと？千冬姉さんの一言で教室が色めき立つ。いいなあとか私も欲しいなあとか疑問の声も聞こえてくる。

「それを聞いて安心しましたわ！」

いきなりオルコットが俺たち前に現れた。コイツめ、やりおる。おでこに指二本あててピシユンって瞬間移動ができるな。

「クラス代表の決定戦。わたくしとあなたたちでは勝負は見えていきますけど？わたくしが専用機。あなたたちが訓練機ではフェアではありませんものね」

「じゃあお前も専用機を持つてるのか？」

「ご存じないの？庶民のあなたに教えて差し上げましょう」

オルコットは胸に手をあて自慢げに語りだした。

「このわたくしセシリア・オルコットはイギリス代表候補生。つまり、すでに専用機を持っていますの。世界にISはわずか467機。

その一機を専用機として持っている人間は全人類60億の中でもエリート中のエリートなのですわ！」

腰に手をあてビシツと右手で斜め上を指すオルコット。そういうポーズが本当に様になっている。

「467機…少ない…」

世界最強の兵器が500もないのはおかしい。一騎当千の力を持つていても少なすぎる。首をひねる俺に秋二が助け舟を出してくれた。

「ISの中心に使われている“コア”って技術は一切開示されていない。しかも、“コア”そのものが完全なブラックボックスだから『制作者』である篠ノ之東博士にしか作れない。でも、博士はもう“コア”を作らないと宣言し行方を眩ました。だから、どこの国や企業、組織でも割り振られた“コア”を使いまわして、研究開発とか訓練をやってるのが現状なんだ。以上、教科書6ページの要約。テストに出るからちゃんと覚える様に。」

「はい」

勉強家な身内がいると本当に助かるな。秋二の話からするとかなり貴重な物を自分専用を持っているのか。それってすごいな。オルコットの前で口には出さないけど。

「あの、先生。篠ノ之さんってもしかして、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……」

クラスメイトの一人がおずおずと千冬姉えに質問する。同じ名字

だし気になるよな。

「そつだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

ばらした。先生、個人情報です。まずいでしょう。ほら箒の周りに人だかりができてしまった。

「すまないな…。私は姉さんほどISに詳しくないんだ。それに今、あの人どこにいるか家族にもわからないんだ。本当に済まない」

集まってきたクラスメイトに申し訳なさそうに答える箒。そういえば束さんと箒、仲良かったな。やっぱり気にしてるんだ。

篠ノ之束。ISの基礎理論と“コア”をたった一人で作り上げた希代の天才で千冬姉えの幼なじみで大親友で箒のお姉さん。

で、その人は現在行方不明。世界各国が目下全力で捜索中。兵器の作り方を知っている人間が行方知れずつてのは、お偉いさんも気が気じゃないらしい。俺からすればいいお姉さんってだけなんだが。かなり変わってるけど。

「んん。お前たち席に就け。山田先生、授業を」

「は、はい。それでは昨日のおさらいから始めましょう。ISは意識のようなものを持っているという話を…」

千冬姉えの指示でオルコットと箒に集まっていた連中は銘々に席に戻り、山田先生が授業を始めた。

ちらりと箒の方を見る。暗い表情でうつむいたままだ。

(昼飯にでも誘つか。そうすれば箒の気も紛れるだろ)

「織斑兄」

「はいっ!？」

「ついさつき山田先生が説明した、ISの意識とその意義について
言ってみろ」

「えーっと・・・」

やべ。全然聞いてなかった。

「授業中によそ見をするな」

教室に乾いた音が響いた。千冬姉え、出席簿って意外と硬いんだ
ぜ？

昼休み、箒と俺たちは食堂で飯を食っていた。メニューは日替わり
り定食。食堂のおばちゃん曰く「うまそうじゃなくて、うまいんだ
よ」とのじむ。

「なあ。オルコットさんとの勝負、どうする？」秋二が茶碗片手に

話かけてきた「俺たちで何かしらやっておかないと彼女に勝てないよ」

「んー、IS動かすところから始めるか？基礎知識は授業でなんとかするとして…教えてくれる人も探さないとな」

俺はISに関して門外漢。秋二もそれなりに知識はあるけどド素人。この状況なら人から教わった方が絶対に効率がいい。千冬姉えに頼めるかな…。

「それなら私が教えようか？」

「マジ？」

「ああ。私は別に構わないぞ」

「どうしよう」

「サンキュ、箒。よろしく頼む！」

悩むなよ、秋二。幼なじみが言ってくれてるんだ。せっかくなんだから厚意に甘えようぜ。

「そうか…そうか。なら、今日の放課後は剣道場に集合だ。一度、腕が鈍っていないか見てやるう」

「オツケー。マジで助かった。千冬姉えに頼もうかと思ってたんだよ。」

「千冬さんは多忙だ。無理を言うのはよくない。それに生徒同士で

教えあつた方が勉強にもなるからな」

どことなく嬉しそうに言う箒。よかった。気は紛れたみたいだ。

「箒ちゃん、本当にいいの？部活あるんでしょ？」

「大丈夫。どちらかと言えばそのついでだ。気にするな」

「わかった」

箒がそこまで言うならと秋二も了解した。これ以後は来週まで練習あるのみだな。

放課後。織斑兄弟は箒との約束で剣道場にいた。

「なんだ、その体たらくは！」

剣道場の床を叩く竹刀が大きな音を立てる。剣道着に身を包んだ箒は秋二に怒りを露わにしていた。

「剣道自体、久しぶり…箒、ちゃん、強すぎ…」

床に手をつき、へばっている秋二。彼は腕試しと称して箒と一本

勝負したのだが、三度も負けて^{みたひ}箒に説教を受けていた。それもそのはず、彼が剣道部の部長から聞いた箒の中学生全国剣道大会・優勝の話は嘘ではないのだから。

「情けない。剣道で男が女に負けるなどと…悔しくないのか！」

「まあまあ。箒そのぐらいにしてやれって。」

「一夏。弟がここまで弱くなっているんだぞ！お前は恥ずかしくないのか!？」

「仕方ないだろ。こいつ結構運動から離れてたし」

病気で入院したせいで、と箒は一夏に小声で告げられる。箒は幼少から秋二がそうであったことを思い出した。秋二は決して身体が強い方ではない。これも彼が箒に太刀打ちできない理由の一つなのだ。

「分かった…。秋二、端で休んでいる。お前は基礎トレーニングからだ」

「えっ、ISは？」

「IS以前の問題だ。メニューは後で考えてやるから安心しろ」

「さいですか…」

口調こそ柔らかかだが彼女は言い出したら聞かない。そんな幼なじみに秋二はあきらめるしかなかった。彼は立ち上がるとよろよると壁際へ移動した。

「じゃ、次は俺だな」

「ああ。お前まで腕が錆びていたら承知しないぞ」

「まさか。心配するなよ。お前のじいちゃん直伝だぜ？」

一夏はそう言って竹刀を構える。箒を含む篠ノ一家が引越してからもアルバイトの傍ら剣道部に顔を出していたし、体力づくりも欠かさなかった。

「そうか。ならば行くぞ！」

「来い！！」

一夏と箒の一本勝負。竹刀同士のぶつかる音とそれぞれの雄叫びおたけびが剣道場に響いた。

「はあ…秋二め、鍛えろとあれほど言われていたのに…」

稽古を終え、剣道場の更衣室で着替えをしながら箒は文句を言っていた。

(しかし、少しきつく言い過ぎだかもしれん)

この調子では秋二は泣き言を言いだすだろう。幼いころの兄について歩く弟の姿を思うと彼の気弱な印象はぬぐえなかった。

「一夏は相変わらず強かったな」

一夏が自分と五分の勝負をして見せるとは思わなかった。剣の腕も含め六年前よりも彼は変わった。ニューズで彼の顔を見た時は大きくなったくらいにしか思わなかったが、実際に会ってみると大違いだ。生意気だった瞳は強い光を宿すようになり、伸びた背丈が纏う雰囲気は時折“男らしさ”を感じさせた。

“綺麗になりすぎてわからなかったぜ”

何よりこの言葉が嬉しかった。自分を初めて可愛いと言ってくれた男の子。彼は久しぶりに再会しても自分のことを綺麗だと言ってくれた。

(私もかっこよくなったと思うぞ…)

面と向かって言えないことを心の中で呟いてみる。柄にもない言葉が気恥しくて仕方ない。この言葉を素直に言えば彼に自分の気持ちは伝わるのだろうか、と思考が一夏のこと縛られていく。

「青春だねえ。篠ノ之さん？」

「ぶつ部長!？」

不意に声をかけられ振り返ると、部長をはじめとする部員数名が

ニヤニヤしながら自分を見ているではないか。

「…えと、なんでしょう?」

「いやあ。さっきから手が止まってるなー、と思ってた」

「あつ、これは少し、考えごとをしていて…」

「彼のこと考えてたんでしょ」

「べ、別に、あいつのことではなくて…その…」

その反応を他の部員も見逃さなかった。さて、その“あいつ”はどちらだろうか。それを聞き出すべく包囲網が形成される。

「篠ノ之さんって、ああいう感じの男子が好みなんだ」

「でも、二人とも結構タイプ違くない?」

「ねえ、ぶっちゃけどっちなの?」

「私はただ、同門の不出来を嘆いているだけで…!」

「……ふん……」

花も恥じらう十代乙女。他人の恋が気になるお年頃。この全寮制女子校という環境では恋愛話 俗に言う恋バナ はかなり貴重なのだ。

「…っし、失礼します!」

じりじりと狭められる包囲網に耐えきらなくなった篤は速攻で制服に着替え、更衣室を飛び出した。結い忘れた髪を振り乱し、彼女は寮に向かって全力疾走するのであった。

第四話 特訓開始（後書き）

いかがだったでしょうか第四話。

篤が束のことを気にしていたり、一夏がそれなりに強かったり、原作と違うところがちらほらと出てきました。

秋二の体力不足は仕様です。今後伸ばしやすいつて理由があったりあったり（笑）

篤は再会した一夏に惚れ直し。頑張れヒロイン。

ではまた次回。

第五話 クラス代表決定戦・前編（前書き）

読んでくださる皆様。遅くなつてすいません。

書き方を変えて全体に間を取る形にしました。

それではようやくバトル有りなお話です。どうぞ。

第五話 クラス代表決定戦・前編

箒との特訓を始めて早一週間。セシリア・オルコットと織斑兄弟のクラス代表戦当日となった。兄弟はそれぞれIS用のボディスーツを着こみ第三アリーナのピットにいる。その傍らには箒がいた。彼らは今、対戦相手の発表を待っている。

「なあ。箒」

「なんだ、一夏」

「俺、一週間剣道しかやってないんだけど」

「俺は筋トレと走り込み…」

「し、仕方ないだろう。お前たちのISは、届いていなかったし…。訓練機の使用許可は下りなかったんだ」

箒の視線はあらぬ方向を向いている。彼らの専用機は今日届くことになっていて。そこで訓練機の使用許可を取ろうとしてみれば手続きと優先順の関係で間に合わなかった。結局、彼らは一週間で剣道と基礎トレーニングに費やし、残りの時間を基礎知識の修得にあてるしかなかったのだ。

「目をそらすな！」

「そらしてなどいない」

「まあまあ。体を動かさず感覚は戻ったし、勉強もしたんだからさ」

「それではトーナメントの組み合わせを発表する」

ピットの管制室から千冬のアナウンスがかかる。

「一回戦は織斑一夏対セシリア・オルコット。勝った方が織斑秋二と決勝戦だ。アリーナを使える時間は限られている。すぐに準備しろ」

「はい」

きつとアリーナの反対側にあるピットでセシリアも同じことを聞いているだろう。二人の表情が引き締まる。

「先にオルコットさんか。兄弟対決はお預けだね」

「でも乗る物がないんじゃないか、なあ……」

試合の直前になっても届かない専用機に一夏は歯噛みをした。今日と言うのだからもっと早く届けてくれてもバチは当たらないと言うのに。

「一夏君、秋二君、届きました！二人の専用機です！」

山田先生のアナウンスに二人は顔を上げた。そして背後の搬入口がゴゴンと音を響かせ、その向こう側を覗かせる。

そこから現れたのは『白』と『鉄』だった。

第五話　クラス代表決定戦・前編

「これが俺のIS……」

一夏はその姿に目を奪われ、嘆息した。

彼は間近でISを見るのはこれが二度目。二度目にこんな美しい機体にお目にかかれるとは思っていなかったのだろう。磨き抜かれた白亜の装甲、白い二対の翼。その白は光を反射し神々しく輝いている。

「……これが？」

一方、秋二は苦笑いを浮かべていた。目の前には教本でよく見たIS、『打鉄』が鎮座している。日本が開発した第二世代機で防御と安定感に定評のある量産機。日本の甲冑を模したその姿はかなりカスタムされてはいるが間違いない。

「はい。これが二人の専用IS『白式』と『打鉄・改』です！」

「簡単な機体の説明をするぞ。『白式』は近接戦闘に特化した新型機だ。武装、能力、共にそれに準じてモノになっている。『打鉄・改』は第二世代型『打鉄』の改修機。読んで字のごとくだな。後付^{イク}装備^{ライザ}がある。武装の確認をしておくように。」

「先生。俺はなんで量産機なんですか？」

説明を受けて秋二は管制室の千冬に回線を通じて問うてみた。

「政府は男性操縦者が量産機を運用した際のデータも欲しいそうだな。」

「だからって……」

新装備、新型機のデータ収集は一夏が担当。どうせなら自分もそつちがよかったと思うのは必然だ。

「つべこべ言うな。早く装着しろ。時間がない。一夏、^{フォーマット}初期化と最適化^{イッテイング}処理は実戦でやれ。秋二は試合中にこの作業をやっておけ」

そう言われて二人はそれぞれの機体に向き直る。

「身体を預ける様に。ああそうだ。後はシステムが最適化する」

二人は千冬の指示に従って、ISのコックピットに登上する。すると開いていた脚部ユニットが足に取り付き、腕部ユニットが彼らの腕を吸い込んだ。カシュッ、カシュッ、と空気を立ててボディアーマーが装着されていく。

《Access》

スキンバリア

皮膜装甲、展開完了

スラスター

推進機正常作動、確認

ハイパーセンサー最適化完了

全てが繋がった。二人の視界がよりクリアになり、360度に広がる。ピットの全景、カタパルト向こう、さらに遠くへ視点が進んでいく。

「一夏、秋二…」

「平気だ、箒。なんと言うか…コイツは馴染む」

心配そうな箒。一夏は彼女を安心させるために返事をする。白式は、一ただこの時を待っていたかのように彼と呼吸を合わせていた。白式が急ピッチでフォーマットとフィッティングを開始する。

「俺は違和感ありありなんだけど…」

隣では秋二が文句タラタラだ。その裏では打鉄・改が秋二の情報を読み取り、せっせと作業を進めていた。

ちきちき、カリカリとコンピュータの読み込みに似た音を立て、

ソフトウェアハードウェア

彼に合わせた中身と外見の書き換え作業が進められる。

「ハイパーセンサーは正常に稼働しているようだな。一夏、秋二、気分は悪くないか？」

ピットの管制室にいる千冬が回線を介して二人に声をかける。その声にはどこか心配するような響きが含まれていた。

「大丈夫！千冬姉え。いける」

「とりあえず安心して姉さん」

「そうか」

ほっとしたように返事をする千冬。心配している姉に弟たちは顔を見合わせる。

「心配かけてるな、俺たち」

「そう思うなら勝って来いよ。一夏」

「おう」

拳を突き合わせる兄弟。お互いの気持ちを確認すると一夏はレールカタパルトに機体を進める。

「それじゃ、行ってきます」

二人に一夏はサムズアップをしてカタパルトに白式を固定する。この滑走路の向こうにはもう対戦相手が控えているだろう。淑女シテイをこれ以上待たせる訳にはいかない。

カタパルトに身体を押され飛び立つ。ふわりと独特の浮遊感。彼が生まれて初めて飛んだ空はいつも見ている空よりもとても近くて清々しかった。

一夏の眼前に広がる空の舞台にはすでに先客がいた。

セシリア・オルコット。彼女は自身の専用機『ブルー・ティアーズ』を装着し、役者が舞台に揃うのを待っていた。左右一対の非固定浮遊部位に二枚ずつ接続された計四枚のフィン・アーマーを背に従えたその蒼い機体は、身に纏う彼女の雰囲気も相まって王国騎士のような気高さを感じさせた。

セシリアは視界の端にピットから飛び立つ機体を確認する。

敵機確認。機体名称『白式』。操縦者・織斑一夏。戦闘タイプ、近接格闘型、装備、近接ブレード・詳細不明。

ブルー・ティアーズのハイパーセンサーが一夏と白式を捉え、その情報を送ってくる。しかし、それは彼女にとっては些細なこと。おそらく相手も自分の情報を受け取っているだろうが関係はない。

セシリアはブルー・ティアーズの武装、六七口径特殊レーザーライフル『スターライトMK?』を呼び出し、光がライフルの形をなし、2メートルはあろうそれは彼女の右手に握られた。ISのパワーアシストと基本浮いているという特性のお陰で、身の丈以上の得物を持つことが可能になる。

「あら、逃げずに来ましたのね」

「敵前逃亡は士道不覚悟って言うだろ？」

セシリアの挑発に応えてみせる一夏。

「よろしい。なら、最後のチャンスをあげますわ」

「チャンス？なんだよ、それ」

自分に銃口を向けず嘲笑を浮かべるセシリアに一夏は眉をひそめる。

一夏は白式唯一の武装、名称不明の近接ブレードを呼び出し。大ぶりな刀は光の粒子によって形作られ、一夏の両手にすっかり握られる。一夏はある意味でほっとしていた。扱いの分からない武器より慣れた刀の方がいいと。

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。今ここで謝るのなら許してあげないこともなくってよ？」

「嫌だね。俺だってISに乗ってるんだ。弱いもの扱いはやめてくれ」

「あら。言いますのね」

「いくらでも言うさ。強い弱いに男・女は関係ないってことを、見せてやるよ」

「そんなこと、あなたに出来るかしら？」

お互いに武器を構え、開始の合図を待つ。

“両者、試合開始！！”

ピーッ！と開始を告げるブザー音と共に『白』に『蒼』の一閃が

襲いかかる。

キュインッ！

「っ！！」

一夏は独特の射撃音と同時に迫る光線を大きく身を捻ってかわす。

ダメージ21。シールドエネルギー残量、579。実体ダメージなし。

わずかに掠ったらしい。そのダメージを機体がアウンスする。

ISは“シールドバリア”と呼ばれる不可視のエネルギー障壁で機体と装着者を守っている。ISバトルではこの“シールドバリア”のエネルギー、“シールドエネルギー”を0にした者が勝利となる。

基本的にダメージを受けると数値化されたシールドエネルギーが減少する。ただし、攻撃がバリアを貫通した場合は実体ダメージが発生する。そのダメージ量と被弾箇所によっては機体が損傷し戦闘に支障をきたしてしまう。

さらにISには“絶対防御”と呼ばれる機能が搭載されている。あらゆる攻撃から装着者の生命を守る代わりに極端にシールドエネルギーを極端に消耗する。それ故にこれが発動すればISバトルで致命的な痛手。だが裏を返せばこの“絶対防御”を発動させられれば一発逆転も可能だ。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

回避のために身を翻し飛び回る一夏はダンサー、セシリアは円舞曲の指揮者とも言おうか。セシリアは射撃の手を緩めることなくビームの雨を浴びせかける。

「ああ！もう！」

機体を地面すれすれで飛ばし、今度は急上昇。相手に狙いをつけられないように回避に専念する。

「ふふつ。行きなさい、ブルー・ティアーズ」

セシリアは徹底的に回避の体勢をとる一夏をみて余裕の表情。空にいてる左手をゆるりと横に振るう。するとブルー・ティアーズが持つ四枚のフィン・アーマーが分離し、一夏めがけて飛来する。

「うわああ！？」

次の瞬間。四方からの衝撃に襲われてバランスを崩し白式の高さが下がる。なんとか体勢を立て直してセシリアに機体を向けた。何が何だか分からない一夏に白式はついさっきのダメージを知らせる。

自立機動兵器による射撃と断定。バリア貫通。ダメージ97。シールドエネルギー残量、482。実体ダメージレベル中。

「自立…機動兵器？」

「そう。これがわたくしとブルー・ティアーズの真骨頂ですわ」

四枚の蒼い翅を従え、セシリアはにこやかに微笑んで見せる。倒せる敵を如何にして倒すか。自分の不敗を信じてやまない、自信の

微笑み。それは一夏に獰猛な狩人を連想させることは難しくなかった。

「…上等」

一夏の初めてのISバトルが幕を開けた。

「…27分。初見でこつも耐えたのはあなたが初めてですわ」

シールドエネルギー残量101。実体ダメージレベル中。機体損傷レベル中破。

「そりゃどうも」

威勢よく応えて見せても俺の状況はよろしくない。いや、かなり悪い。白式のアラートがガンガン鳴っている。

俺はフィン状のパーツに銃口が空いた自立機動兵器『ブルー・テイアーズ』いわゆる所謂ビット兵器 にいいようにやられていた。

ビットのオールレンジ射撃とオルコット本人からの射撃コンビネーションで俺を寄せ付けず、オルコットはアリーナの空を優雅に舞

った。

「では、閉幕と参りましょう」^{フィナーレ}

オルコットの命を受け、ビットが飛翔する。その銃口はしっかりと俺を見据えていた。一斉掃射で決着をつけるつもりだ。

でもな、俺はただ撃たれてたわけじゃない！

「そう簡単に終われるか！」

ビットからの放たれる一射目のレーザーをかくぐり、それを撃ちこんできた背後に浮かぶ一機に肉薄する。

「せえい！！」

蒼い翅を一刀のもとに切り捨てる。返す刀で近くに浮遊していたもう一機に刃を浴びせる。二枚の翅は切り口から火花を吹き、四散した。

「なっ！？」

オルコットは驚きを隠さぬまま二機のビットを手元に引き戻す。

「ここだあああっ！！！」

オルコットの元に戻っていくビットと一緒に彼女めがけて間合いを詰める。

慌ててライフルを構えるオルコットに向かってブレードを振り下ろす。ガキンと言う金属同士がぶつかりあう音が響き、ライフルが真つ二つに裂けた。数瞬の後にライフルが火花に変わる。

「無茶苦茶しますわね…！」

ビットとライフルを破壊され俺から距離を取ったオルコットは苦々しげに顔をゆがめる。ついさっきまでの余裕は微塵もない。やっぱりそうだ。

「ようやく読めたぜ。ビットを使っているときは他の攻撃が出来ない」

俺のつぶやきを聞いてオルコットは目を見開く。凶星だな。

「ビットの操作にかなり集中力があるんだろ？突撃に合わせてライフルを撃てなかったのがいい証拠だ。」

にっと歯を出して笑ってやる。効果覲面だな。オルコットがわなわなと震えだした。

「それに、ビットはお前が日々命令を出さないと動かないようだな」
自立した機動兵器であって自動ではない。だからオルコットは操作に集中しなければならぬんだ。

さらに言えば、ビットの狙いが集中しているのは俺の視界の外側だ。ISのハイパーセンサーのお陰で全方位360°が見える。しかし普段見えていない場所、死角に対する反応がどうしても遅れてしまう。オルコットはそこを突いてくる。

逆を言えばそこに攻撃が集中しているから、狙ってくる場所を判断できる。

「わかった所であなは虫の息！すぐに楽にしてあげますわ！」

「やってみる！」

死中に活を見出すとはまさにこのこと。ようやく勝利の光明が見えてきた。

「はあ…すごいですね。ISの起動が二度目だとは思えません」

ピットの管制室、リアルタイムモニターで試合を観戦している真耶が感嘆の息をもらした。はるか格上の代表候補生を相手に一夏は初心者とは思えないほど善戦していた。真耶が驚くのも無理はない。しかし隣に立つ千冬は厳しい表情を浮かべた。

「あの馬鹿者。浮かれているな」

「えっ。どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれが出るときは、決まって簡単なミスをする」

「はあ…よく見てらっしゃいますね。さすがご姉弟です」

千冬の弟に対する見識に感心している真耶。その眼下のピットでも千冬と同じように兄の癖に言及する者がいた。

「大丈夫かな。あれで…」

秋二は打鉄改に搭乗したままの状態で見守っていた。兄をよく知るからこそ彼の表情には不安の色がにじむ。

「一夏…」

その傍らでは篝もスクリーンを見つめていた。その顔には心配や期待が入り混じった表情が浮かんでいた。篝は祈るような性分ではない。しかし、いざ試合が始まってみれば一夏を応援し、固唾を飲んでその姿を見守っていた。

（勝ってくれ……）

彼女が握りしめた手に力を込めた時、試合が動いた。

「行くぞー!!」

「…ッ！ブルー・ティアーズ！」

一夏はセシリアに向けて機体を全速力で走らせる。セシリアはすかさずブルー・ティアーズを展開、応戦する。しかし、手数が半分になったそれをかわすことは容易い。一夏は残り二基のビットを切り捨て、セシリアの前に躍り出る。

(取った！)

「かかりましたわ」

彼女の腰に着いたスカートアーマー。その円筒形のパーツが向きを変え、一夏を捉える。そこから吐き出されたモノ。それは…

「いつ！？」(ミサイルう！？)

最大加速で突っ込む一夏。一直線に向かってくるミサイル。その結果は考えるまでもない。

ドカアアアーン！！

閃光と爆音。爆炎に包まれ、白い翼が地に墮ちた。

バリア貫通。ダメージ88。シールドエネルギー残量13。実
体ダメージ大。機体損傷レベル大破。戦闘継続、困難と判定。

「ゲホッ、ゲッホ。くそ…」

一夏はブレードを杖代わりに機体を起こし、土煙を振り払う。彼の耳元では白式が鳴らす警報が響いていた。

「無様ですわね」

アリーナの地上にセシリアが降り立つ。ミサイルに白いアーマーを焼かれあちこち焦げだらけの一夏と白式を前にし、ブルー・ティアーズの残りの砲口を彼らに向ける。

「なぜそうまでして、あがきますの？」

「最初に行つたる。強さに男・女は関係ないって」

セシリアの問いに力強く一夏は答える。

「俺はずっと強い人に守られてきた……。その人は女だから強いとか。ISが使えるから強いとか。そんなこと言われなかったし、言わなかった！」

真つ直ぐに彼女を見据え、いまだ折れぬ闘志をその目に滾らせ宣誓する。

「だから証明して見せるんだよ！俺が信じる強さを！」

彼がありつたけの思いを吐き出した。その時だった。

白式が光の粒子に弾け、粒子が再び白き装甲を造り上げる。工業的なラインは消え去り、中世の鎧を思わせるシルエットに変わった。そして翼は大きく広がり黄金の装飾が輝きを放つ。

「ま、まさか……ファーストシフト一次移行！？ あ、あなた今まで初期設定だけの機体だけで戦っていたって言うの！？」

フォーマット、フィッティング、全処理過程終了。ファーストシフト完了しました。確認ボタンを押してください。

近接特化ブレード『ゆきひらにがた雪片式型』展開可能。単一仕様能力『ワンオフ・マヒリティ零落れいらく白夜』使用可能。

一夏は眼前のディスプレイの確認ボタンを迷わずに押した。改めて銘を示された刀に目を落とす。

「ハハ：千冬姉の刀か。すごいもの預かっちゃったな」

不思議と笑みがこぼれた。

『雪片』 かつて千冬が振るい、ISバトル世界一まで駆け上がった、名実ともに最強の一振り。それと同じ名前の刀を今、自分が手にしている。

「負けるわけにはいかないな」

「…は？あなた、何を言ってる」

一夏は刀を握り直し、セシリアと向き直る。刀型のブレードが鎧しのの部分から展開し柄つかのような形に変形し白く光る刃が出現する。

「やるぞ白式！！」

再び相手に突撃。一次移行前とは比べ物にならないスピードでセシリアへ突き進む。

「ッ！ブルー・ティアーズ！！」

セシリアも一夏のアクションからワントempoおいて残された二つの砲門からミサイルを吐き出す。

一夏は二基のミサイルを横一闪。両断されたミサイルは勢いのままに彼を通り過ぎその背後で爆散する。その爆風が届くよりも速く一夏はセシリアに迫る！

『零落白夜』発動

そのメッセージと共に光刃がより強い輝きを放つ。

「おおおおっ！！」

一夏はセシリアの懐に飛び込み、上段からの袈裟切りを放つ。が、それが届く寸前で光の刃が霞のごとくかき消え、大きく空振った。

「へ？」

「え？」

その瞬間は二人にとって永遠にも感じられたらう。何があった？と言つ顔のまま…

「のおおおおおおおっ！？」

「きゃああああああっ！？」

ガツンと言つ金属同士の衝突音。一夏とセシリアはもつれながら盛大に地面に転がった。

“試合終了。勝者 セシリア・オルコット”

「なんで!?!」

一夏は激突直後になり響いた試合終了のブザーに、がばつと顔を上げ疑問の声を上げる。だが、その疑問は今自分が右手が掴んでいる物によって吹きとんだ。白式のマニピュレーターを介して伝わるマシユマロのように柔らかく程よい弾力はまさにアレ以外にない。

そう、彼は女性の 下敷きになったセシリアの 胸を鷲掴みにしていた。

「~~~~つ!~!~!」

「ちよっ、ま」

ズバーン!!

セシリアはブルーの瞳に涙をいっぱい溜め、羞恥と怒りのままに一夏を張り倒した。

こうして一夏初のISバトルは訳もわからぬまま、なんとも締まらない形で幕を迎えた。

第五話 クラス代表決定戦・前編（後書き）

ラストは一夏のラッキースケベで終了。ラブコメ主人公だから大丈夫ですよね？（笑）

そして、秋二のIS『打鉄・改』登場。機体チヨイスは量産機大好きな自分の趣味。カスタムとか大好きなんです。

話変わって、秋二のヒロインを誰にしようかものすごい悩んでいます。

ちよろ可愛いセシリアにすべきか、ツンデレ鈴にすべきか、男装美人シャルロットにすべきか。

かなりの悩みどころ。うーぬ（-公-）

そこで、読者のみなさんの意見をお聞かせください。

どなたでも感想を書けるようになっていきます。

ヒロインの名前だけでもいいんで感想に書いていただけると幸いです。

ちなみにラウラがないのは彼女に別な役回りがあるからです。

第六話 クラス代表決定戦・後編（前書き）

遅くなりました（汗）

前回のアンケートに回答していただいた皆様、ありがとうございます！

それでは第六話です。どうぞ

第六話 クラス代表決定戦・後編

パンツ！ と、快音が響くここはIS学園・第三アリーナのAピット。目の前には筒状に丸めたノートで自分の肩を叩く千冬姉がいる。

「大見得切って負けたくせに、ちゃっかりやることをやってくるとはさすがだな。この大馬鹿者」

セシリアとの対戦負けた俺は正座。管制室から降りてきた千冬姉からありがた〜いお説教を頂戴していた。主に俺のセクハ…じゃなくて、事故に関してだ。

「それはその…事故ですよ、事故」

「生憎、相手から訴えられたらその理屈は通用しない。謝って許されるかどうかも怪しいな」

ですよね。痴漢、セクハラは問答無用で実刑確定、刑務所送りのご時世ですもんね。ヤバい、これは後が怖いパターンだ…。ちゃんと謝ろう。結果がどうあれ。

「ふんっ。自業自得だ、この助平」

「違うよ、篝ちゃん。あれはラッキースケベって言うんだ」

おいおいそりゃないだろう。二人ともちよつとくらい弁護してくれたっていいじゃないか。で、ちよつと待て。

「どの道スケベじゃねえかつ!!」

スパアン!!

「話を聞け」

(二度もぶった!? 親父にもぶたれたことないのに!!……このネタ、使いどころないと思ってたけど意外とあるもんだな)

「今ふざけたことを考えただろう?」

「……」

なんで読めるんだろう。さすが我が姉と言っべきか。俺の思考がダダ漏れと言っべきか。

ズバアンツ!!!

はい、すみません。真面目に聞きます。

代表決定戦・決勝までのインターバル中に一夏の敗因が判明した。

「バリア無効化攻撃？」

「ああ。お前の白式が備えている『雪片式型』の特殊能力だ。」

頭の上に疑問符を浮かべている一夏に千冬は頷き、説明していく。

「名を『零落白夜^{れいらくひやくちや}』。相手のエネルギー残量にかかわらずシールドを切り裂き、装着者に対して直接ダメージを与える。ただし、この能力は自身のシールドエネルギーを攻撃に転化して運用されるものだ」

「シールドを使うのか…ってことは俺、自滅した？」

「そうだ」

スパツと千冬に言い切られ、一夏はがくりと肩を落とす。なければシールドを全て攻撃に使ってしまい、敗北。話を聞く限りでは、当てれば勝てたかもしれないだけに悔しさがこみあげてくる。

シールドにかかわらず装備者にダメージを与えられる力。そうすれば『絶対防御』が発動し、相手のシールドエネルギーをこっそり削れる。しかし、当たらなければ意味はない。

「当てれば一撃必殺。外せば命が削れる諸刃の剣。まあ、さしずめ欠陥機と言ったところだな」

「はあ？ 欠陥機！？ 今、欠陥っ」

バシンッ！！

授業中に三回、試合後に四回、本日通算七回目の千冬チョップ。彼はもう少し口のきき方に気をつけるべきだろう。

「言い方が悪かったな。ISはそもそも未完成な兵器だ。欠陥も何もない。お前の機体は他より攻撃特化になっているだけだ」

「……………」

一夏は右腕の待機状態であるガントレットになった白式に視線を移す。

「今後は武器の特性を理解した上で使え。理解せずに使うとどうなるかは、身を持って分かっただろう。明日からは訓練に励め。暇があったらISを起動しろ」

「はい」

負けた理由は自分の力量不足。それを痛感した一夏は右手を握りしめ、姉の言葉にうなずいた。

「わかればいい。織斑弟。お前のISはどうなっている？」

「バッチリOKです。先生。来い、打鉄うちがね」

自分の機体に呼びかけ左腕のリストバンクル 待機状態の打鉄・改 に触れる。そうすると量子化していたISが瞬時に展開し、秋二は打鉄・改を装備した姿になった。

「ファーストシフト一次移行は終了。装備の確認も終わってます。直ぐに始められますよ」

そう言っで自分のISを披露する。

打鉄・改を身に付けた秋二はさながら鎧武者のような姿になっていた。ボディアーマーは胸と腰をガッチリ覆う形に変わり、袖状だった腕部ユニットは籠手状に変化。何より目を引くのは大型化した両肩の横に浮く非固定浮遊部位アンロック・ユニットだ。甲冑具足の肩鎧と言うよりは盾と評した方がいいだろう。それはこの機体が防御型と言う事実を周囲に強く認識させた。

「よし。お前はそのまま待機だ。オルコットの機体チェックと補給が終わり次第、決勝を始めるぞ。いいな？」

「了解です」

「織斑兄と篠ノ之は管制室に上がれ。上のモニターの方が見やすいからな」

「はい」

「わかりました」

指示を出した千冬は踵を返しスタスタと管制室に戻っていく。

「それじゃ、秋二。負けんなよ」

「がんばれ。ただし、無理はしないようにな」

「うん、ありがとう。一夏。篝ちゃん」

一夏と篝は秋二にエールを送ると千冬の後続に続いた。一人ピットに残された秋二はセシリアとブルー・ティアーズの戦闘データをディスプレイに呼び出し、それに目を通していく。

(ブルー・ティアーズの同時多角攻撃が一番厄介か。これがねえ。一夏がぶっ壊したけど予備あるのかな？あると思っただ方がいいか)

対戦相手の攻略法を編み出すべく、思考に没頭するのであった。

秋二は腕組みしながら人を待っていた。女性の身支度は時間がかかる物、と心得ている彼はさも当然といった様子で佇んでいる。

「お待たせいたしました」

「そんなことないよ」

見目麗しい金髪の少女と端正な顔の黒髪の少年。待ち合わせでお約束のやり取りをする二人はドラマのワンシーンのような華やかさだ。が、身につけている現行最強の機動兵器『インフィニット・ストラトス』がそのシチュエーションを完全に否定している。

（予備の武装は 印。準備に時間がかかっていたところを見ると、武装のインストールに時間がかかったんだね…）

秋二は普段のメガネではなくヘッドギアから発生するホログラムバイザーの奥から替えの武装を持って来たセシリアとブルー・テイアーズを見据える。彼女が手にしているのは別型のライフルで、虎の子のビットは二機しかない。

「あの…さつきはゴメンね。アイツが失礼なことしちゃったみたいで」

「あなたに謝っていただけでも仕方ありませんわ…！」

兄のやらかしたことを申し訳なさそうに謝る秋二にセシリアは嫌なことを思い出させるなど言わんばかりにぶいっと顔をそむける。そんなセシリアに秋二は終始苦笑いだ。

「んんっ。それはもういいですね。さあ、開始の合図が出ているのですから、早く構えてくださる？」

「ん？ずいぶんとやる気だね」

秋二はセシリアの言葉に眉をひそめる。つい先ほどの戦いで兄を散々小馬鹿にしていた彼女がかなり真剣な表情をしていることに原因があるう。

「早くあなたを倒してシャワーを浴びたいだけですわっ」

「そう…」

秋二は一人で納得し含み笑いをした。彼女に闘志がありありと見える。不遜にふるまって見せる彼女の瞳からそれを感じ取った。そして、出来ることなら兄との戦いにもその目で臨んで欲しかった。

「なら見せてもらおうかな…」

打鉄・改の武装一覧から対装甲実体刀《菊一文字》を展開^{オープン}、鞘と共に左腰にマウントされたそれを抜き払う。

「代表候補生の実力とやらを」

「もちろん。嫌というほどに見せつけてあげますわ」

ブルー・ティアーズのレーザービットが舞い上がり、ミサイルの照準がぴたりとロックされる。

剣士が駆け、銃撃手が引き金を引く。決勝の幕が上がった。

「はあ、すごいなアイツら」

「なんとというか…巧いな」

「これからが楽しみですねえ」

秋二とセシリアの戦いをモニターで見る一夏、箒、真耶。三者三様の感想を述べていた。

開始直後から熾烈になるバトル。

セシリアは一夏との戦いで見せた余裕と優雅さを強調した挙動は一切なく、その銃口は秋二を捉えて離さない。対する秋二も食らいついてくるレーザーやミサイルを肩に配された大型の盾を使って防御しつつ、距離を詰め彼女に肉薄している。

「確かにいい試合だな。だが、この試合、秋二が負ける」

「…えっ?」

冷静な千冬の見解に三人が振り返る。

「結構、いい線いってるんじゃないですか?だってほら、俺がオルコットの癖とか色々教えたし」

「忘れたのか?秋二はド素人だぞ。それにアイツのアドバンテージは相手が自分を知らないからこそ、だ。自分の手の内をさらした後ではそれもなくなる。実際に…」

モニターを見るように促す千冬。そこには二枚の盾を背後に回した秋二と打鉄・改がブルー・ティアーズに正面から撃ち抜かれる様

だった。

「アイツは見聞きしたオルコットの情報を元に戦っていたようだが、
ばれたみたいだな。それを直ぐに看破して対応できるのは地力の差
だ」

千冬の言う通り、徐々に劣勢になっていく秋二。ビットの狙いが
読めなくなり防御が一步また一步を遅くなっていく。

(おまえの頭ならなんとかできるだろ…？秋二…)

一夏の思いと裏腹に画面の向こう側で秋二がセシリアの射撃の餌食
になった。

「ブルー・ティアーズ!!」

「チツ…^{ゲツキ}月亀!」

オルコットさんの容赦のない攻撃に俺は切り札を切らざるを得な
かった。

二枚の盾それぞれがスライド展開。ブルー・ティアーズのビームに
割って入る形でクリアオレンジのエナジーシールド(Eシールド)
が出現する。

そのまま六角形のシールドパネルを大量に発生させ、自分を球形に包みこむ。

実体Eシールド内蔵型複合防盾《月亀》

正真正銘、この機体最強の防御兵装。資料の上では装着者の任意で発生方式を変えられるみたいだが、今の自分ではそんなことできない。

「全方位展開のEシールド…？まだそんなものを…！」

「はあ…はあ…」

もう余裕なんてない。ああ、自分の身体が恨めしい。どれほど息を整えようとしても呼吸は乱れ、心臓が早鐘のように脈打ち、体全身が悲鳴を上げ始める。それでも負けたくない。今ある全てで勝利に食らいつこう。それが相手に対する誠意なのだから。

「コンデンサー解放…」

月亀に内蔵されたコンデンサーのエネルギーを全てEシールドに流し込む。

「モード《崩月》ほつげつ」

バチィッ！！！！

火花の散音が鳴るとEシールドが燐光を帯び、電撃が表面を駆け

「これで、最後だ……!!」

オルコットさんに向かって一撃突貫。体力的にも機体的にも限界の俺ができる最後の一手。全エネルギーを解放しての体当たり。

「そんな特攻まがいの攻撃で……」

次々に打ち出されるビームを弾き、ミサイルの直撃を物ともせず
に突き進む。二度三度と機体同士が交錯する。

「がつ!?!」

ついに彼女の機体を真正面で捉えた。

「押しつぶせ打鉄!!!!」

「ぐうッ…耐えきって見せなさいっ!ブルー・ティアーズ!!」

オルコットさんはバーニア全開でEシールドに手をかけ、押し
か
え
ず
。

「負けてえ、たまるかつ!!」

気合い一発。均衡しかけた状況を強引に打ち破る。

地面にぶつかり、盛大な轍わだちが出来上がる。そんなものお構いなし
にオルコットさんとブルー・ティアーズを押しして…

ズドオオン!!!

アリーナの壁に叩きつけた。

もうもうと立つ土煙の中で俺は膝をついた。

「ぜえ…ぜえ…」

警告！ 前方に動体反応感知
(ゴメン打鉄。もう動けない)

試合終了のブザーは鳴らない。そう、無常にもまだ鳴っていない。
それが示す事実は一っだけ

動けない俺と打鉄の前に土煙を割いて蒼の機体が現れ、ライフル
が眼前につきつけられる。

「わたくしの勝ちですわ」

俺の負けだ

高らかな勝利宣言と閃光に、俺は撃ち抜かれた。

サアアアア……。
シャワーノズルから熱めのお湯が噴き出す。水滴がセシリアの均整のとれた身体を撫で、汗や汚れを洗い流していく。

「
」

自分らしくもなれないと思いつつもセシリアは鼻歌交じりに自分の体を洗っていく。それほどに彼女の心は高揚していた。負けるまいと互いに全力でぶつかり合った。そして、勝った。そのなんと清々しいことか。

だからこそ試合の後、地面に倒れた秋二に自然と手を差し伸べていた。

「立てますか？」

「敵わないなあ……」

本当に悔しそうな表情でつぶやくと彼は自分の手を取って体を起こした。

「初めて戦う相手があなたで本当によかった。次は負けません。絶対に」

「ええ。わたくしもあなたと戦えたことを誇りに思います。その時は全力でお相手いたしますわ」

あの時の自分でも驚くほど素直に賛辞を送ることができた。握手と共に交わした約束が果たされる日が来ることを心待ちにしている自分がいる。

そうさせたのは彼のおかげだ。

「…織斑、一夏…」

不意につぶやいたその名前に手が止まる。思い出されるのはあの強い意思の宿った瞳。信ずる物を真つ直ぐに見据えた曇りのない瞳。自分の父とは大違いだとセシリアは思う。

セシリアは出身は英国貴族の、とりわけ伝統ある名家。

母は女性でありながらいくつもの会社を経営し、オルコット家の当主を務め上げた。強く、厳しく、そして気高い、セシリアが憧れる女性。対して父はひどく情けなかったと彼女は記憶している。名家に婿入りしたことに引け目を感じ、いつも母の顔をうかがっているのが父だった。そんな二人の夫婦仲がいい筈もなく、ISが発表されてからはますます冷え切っていった。

セシリアは母の背中を見て育ち、父の振る舞いを見て、心に決めたことがある。

『情けない男とは結婚しない』

そう決めた時からセシリアの理想の男性像は“強いこと”が第一条件になった。しかし、女尊男卑の風潮が蔓延する今の世にそんな

男性は見つけられなかった。

三年前、両親が列車事故で他界してからセシリアは残された遺産とオルコット家を守るべく様々な勉強をしてきた。その一環で受けたIS適性試験。結果はA+。

この結果を受けて英国政府は戸籍保持のための様々な好条件を示した。それに二つ返事で了承。

そして飛び込んだISの世界。そこでの男性との出会いが無かったわけではない。ISは女性しか扱えないが、それにかかわる職には男性も就いている。開発に携わる研究者。整備班の技術者。パイロットこそ女性だけがそれを支えるバックヤードスタッフの側に男性はいる。

しかし、その皆が皆セシリアより年上。近くとも10歳、下手をすれば祖父と孫ほどの年の差が生まれる。もちろん彼らは恋愛対象外。結局、理想の男性に巡り会うことはなかった。

けれど、ようやく巡り合えた。強い瞳の、ゆるぎない意志を持つ男性に。その思いは自分を変えるほどに強烈で。光のようにまっすぐで。

「織斑一夏…」

もう一度、彼の名前をつぶやいてみる。熱く胸が締めつけられる。甘く切ない感情の奔流で胸がいっぱいになる。

知りたい

自分のこんな気持ちにさせる男性を。

もっと…もっと…

その日、セシリアの火照りは冷めることなかった。

第六話 クラス代表決定戦・後編（後書き）

一夏にホの字のセシリアさん。そして秋二はライバルになるの巻でした。

バトルシーンでかなり難儀しました。オリジナルって難しい…。カッコよく書ける作者の方は本当にすごいです。

ではまた次回。

第七話 騒々しい日々の幕開け（前書き）

気がつけば4000ユニーク突破。

いつも読んでくださる皆様には感謝感謝です。

それでは第七話です、どうぞ。

第七話 騒々しい日々開幕

クラス代表決定戦から一夜明け、俺たちは小鳥がさえずる通学路を歩いていた。

「やっぱり、休んだ方がよかったんじゃないか？」

「嫌だ。高校は、皆勤賞つて、決めたんだ。つう〜…」

俺の心配を頑として聞かない秋二。全身筋肉痛で油が切れたブリキのおもちやのような動きで地面を踏みしめていく。がんばりすぎだろ…。

「昨日はあれだけ動いたのですから、無理をなさると体に障りますわよ。一夏さんも」

「いつものことだから、気にしないで……」

「俺は大丈夫だ。セシリア。気遣いありがとな」

セシリアと合流したのは寮の玄関先。バツタリ会っていきなり名前を呼ばれた時は驚いたが、セシリア曰く「剣を交えた仲で今さらでしょう?」だそうだ。あのことにしても謝ったら許してもらえし。本当によかった。

「ふふっ。どういたしまして」

「なんでお前がいる」

「あら。気まぐれで一緒にしてはいけなかったかしら？」

「ふうん……」

おいおい、仲良くしろよ。秋二も妙な顔して人の顔見ると失礼だぞ。お、そうこうしているうちに昇降口に到着だ。

「一夏君と秋二君だ。おはよー！」

「あっホントだ。おはよう」

「いつちー、しゅーじん、おはよー」

俺たちは銘々に挨拶を返してクラスメイトの、たしか谷本と、鷹たか月つきと、のほ……ほんさん(?)と合流。いかな、早く名前と顔を一致させなければ。あと、あだ名についてはしっかりと語り合う必要があるな。

「ねえねえ、聞いた？クラス代表の話」

「聞いてないけど。あれってセシリアになるんだろ？」

俺、負けちまったし。

「いいえ。私ではありませんわ」

「えっ！？　じゃあ……」

「俺でもないよ」

じゃあ誰だ？クラス代表の候補は俺、秋二、セシリアの三人だけのはずだ。他に秘かに立候補したやつでもいるのか？いや、そんなはずがない。千冬姉えが許可しそうにないし。

俺、秋二、セシリアの中で、セシリアはダメ、秋二もダメ。あつ、俺が残った。と言うことは俺か。俺なのか。そうか、そうか。

「……………あれ？」

なんで、俺？

第七話　騒々しい日々幕開け

「というわけで、一夏くんクラス代表おめでとう！」

「…………おめでと〜!」「…………」

パン、パカパン。クラッカーが鳴らされ紙テープが宙を舞う。周囲が盛り上がる中、テーブルの上座、俗に言うお誕生日席で一夏は一人沈んでいた。

「はあ〜…」

彼の目線の先には女の子らしい丸文字でカラフルに書かれた『一夏くんクラス代表就任パーティー』という模造紙が掲げられていた。

「なんで俺が…………」

朝のSHRでクラス代表はお前だ、と千冬に告げられ抗議するも全面却下で即授業。聞くタイミングを逃し、訳もわからぬまま放課後になり、クラスメイト数人によって寮の食堂に連行されて今に至るといっわけだ。

「それはわたくしが辞退からですわ!」

一夏の疑問に答えるべくその右隣りに座っているセシリアが腰に手をあてて宣言する。

「わたくし、あの時大人気なく怒ったことを反省しまして。一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。実践はIS操縦の糧になりますもの。やはり男子たるもの強くなっていただかないと」

ありがた迷惑とはまさにこのこと。自分よりも“委員長”がよく似合うメガネくんがいるというのに。一夏は斜め向かいに座る弟へ

視線を送った。

「俺は体力的な問題でね。ISに乗るたびにへばってるんじゃ、話にならないでしょ？」

兄の視線に気付いた秋二は苦笑気味にそう答えた。体力はつければ良い、と言っても対抗戦まで日がない上に筋肉痛に悩まされている以上反論ができない。

「いやあ。セシリアもわかってるね」

「うんうん」

「せっかくクラスに男子がいるんだから持ち上げなくっちゃね！」

「うんうん」

わいのわいのと盛り上がるクラスメイト。ちなみに相槌を打っているのは三組の生徒だと記しておこう。ここには一クラス30人の枠に収まりきれない人数が集まっていた。

「人気者だな、一夏」

「……そう思うなら、助けてくれ」

左隣に座る筈にまで嫌味を言われる始末。

「あの…一夏さん」

「どうした？」

「よろしければ…わたくしが、ISの操縦を教えてさしあげましょ
うか？ふたりきりで」

ばん！とテーブルを叩き篤がセシリアの言葉をさえぎった。

「あいにく、一夏の指南役は事足りている。私が直接頼まれたから
な」

「あら？あなたはISランクCの篠ノ之さん。A+のわたくしに「
用かしら？」

「ランクは関係なからう。私には剣の心得がある。射撃用の機体に
乗るお前に、一夏の指導が務まるものか」

「わたくしは代表候補生。こう見えても接近戦の立ち回りは心得て
いますよ？」

「な、なあ、二人とも。せつかくのパーティーなんだし、仲良くや
ろっぜ？」

両サイドで睨み合いを始めた二人に一夏はたじたじ。二人は一夏
が言うなら、と咳払いをして席に着いた。

（篤ちゃんと一夏を取り合う…か。決まりだ。セシリアさんは一夏
に惚れてる。で、一夏の方は…期待するだけ無駄か…）

秋二は思わずため息をついてしまった。当の本人はのんきに篤、
セシリアを含むメンツと喋っている。兄は好かれるくせに恋愛にま
つわるあれこれに人一倍疎いのだ。

(ここは女子校。周りにはみんな女の子。一夏に惚れる子は一人、二人じゃないだろうなあ。)

これから一夏周辺で起きるであろう厄介事を考えただけで秋二は頭が痛くなる思いだ。兄弟ワンセット扱いの自分にも火の粉は絶対に降りかかる。今までそうであつたように、これからも。

「ハハハ……」

「しゅーじん。しゅーじん？なんか遠い目してるけど大丈夫？」

現実逃避をする秋二を引き戻したのは、のほほんさんではなく突然のフラッシュだった。

パシヤツパシヤツ

「うお…！？」

「はいはい。新聞部です。話題の新生、織斑兄弟に突撃インタビューしにきました〜！」

テンション高らかにあらわれたメガネの女生徒。デジタル一眼レフを首から下げ、左腕の腕章にはでかでかと『IS学園新聞部』と刺繍が入っている。

「あ、私は二年のまゆみかおるこ薫子。副部長やってます。よろしくね。はいこれ名刺。じゃあ、まず弟君から行ってみよ〜」

自分の名刺を手渡し、薫子は秋二にボイスレコーダーを向ける。

「女子校に入って一週間。今の気持ちを、どうぞ!」

「…えーと、最初は戸惑いましたけど、今はなんだかんだで楽しいですね。」

「うーん、テンプレだねえ。イケメンだからさあ、もっとこう…彼女たくさん作っちゃうぞ的なこと、言わない?」

「絶対に言いません!」

「ぶーぶー。はい、じゃ今度は一夏くんね。ズバリ、クラス代表になつた感想を、どうぞ!」

秋二のツッコミを適当に流して一夏にボイスレコーダーを向ける。

「…えーと、なんとというか、頑張ります!」

「うーん。二人してなんか普通ねえ。仕方ない、ねつ造しますか」

「「しちやダメだろ!」!」

「おお。双子らしく八モる、と」

薫子はサラサラとメモ帳にペンを走らせる。ペースに乗せられた兄弟は疲労感に襲われていた。

「セシリアちゃんにも…やっぱいいわ。ベタに惚れちゃいましたってことにするから、どっちなの?」

「えっ！？ どっちと言われましても、この場で言うのは…」

「先輩。惚れるってなに馬鹿なことを」

一夏をチラ見しながらもじもじと恥ずかしがるセシリアに御本人様がとどめを刺した。

「馬鹿とはなんですか馬鹿とはっ！大体あなたは」

「あー、はいはい。なんとなくわかったから。写真撮らせてもらえる？」

「「えっ？」」

「注目の専用機持ちでしょ。ほら、秋二君も並んで並んで」

薫子は半ば強引にセシリアを一夏と秋二で挟む形に並べる。

「秋二君、もっと寄って。セシリアちゃんは手とかつないじゃおうか」

ファインダーを覗きながら並んだ三人に指示を出す。セシリアは言われたならと一夏の手にしっかりと指を絡めた。自分に見向きもしないセシリアに秋二は困り気味だ。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

パシヤツッ!!

「残念、74・375でした」

シャツターを切り、からからと笑う薫子。フレームの中には一組のメンバーが勢ぞろいだ。

「なんで皆さんが入ってますのー!!」

「まあまあまあ。いいじゃない」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょ」

「ねー」

「ふむ。これもクラスの思い出だな」

かく言う篤は一夏の腕にしっかりと抱きついていたりもするわけで。

「篠ノ之さん、それはなにかしら…?」

「お前に言われたくはないな」

一夏を挟んでバチバチと火花を散らす篤とセシリア。両手に花という状況で一夏は勘弁してくれと言う顔だ。そこに秋二が仲裁に入

ったりなんだりしながらパーティーは十時過ぎまで続けられるのであった。

パーティーから数日後。四月も下旬となり桜の木に葉が混じり始めた今日この頃。IS学園一年一組は鬼教官こと織斑千冬先生によるISの実地訓練の真っ最中だ。

「それでは本日は基本的な飛行実演を行ってもらおう。織斑兄弟、オ
ルコット。ために飛んでみせる。」

「はい」「わかりましたわ」

パアツと量子の光が秋二とセシリアを包むとISのパーツが展開、二人の体を中心に組み上がっていく。光が消えるとそこにはISに身を包んだ二人がいた。

で、俺はと言うと…。

「集中しろ。熟練した操縦者なら展開に一秒とかからないぞ」

「はいっ」

二人に後れを取っていた俺は千冬姉えにせかされて意識を集中する。

（ 来い、白式 ）

右腕にはまつたガントレットに呼びかけると光が弾けて一瞬で白式が俺に装着される。

ISは一度フィッティングするとアクセサリーの状態で操縦者の体に待機する仕組みになっている。セシリアの場合は左耳のイヤークラスで、秋二は左手のリストバンクル。なんで俺の白式はガチガチの防具なんだか。

「よし。飛べ」

指示を聞いてセシリアはすぐさま上昇を開始、それを俺たち兄弟が追隨する。所定の高度で機体を水平にして空を飛ぶ。セシリアが一番前、その後に秋二、俺と続く形だ。

『何をやっている。スペック上の出力は前の二機より白式の方が上だぞ』

空を飛んでも最後尾をひた走る俺は通信で千冬姉えに叱られた。ISはパッシブ・イナーシャル・キャンセラー（略称：PIC）と言う慣性制御システムを用いて飛行・浮遊・加減速などをこなしているらしいが…。

「空を飛ぶ感覚自体あやふやなんだよな。『自分の前に角錐を展開するイメージ』って言われても…」

「一夏さん。イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

「航空力学の話だよ。まあ、俺は『角錐』がイメージしづらいから、“ジェット機が飛んでる”みたいな感じでやってるけどね」

前を飛んでいた二人が減速して機体を寄せてきた。さらに、ありがたいうたがたいアドバース付き。

セシリアはあの試合以来、何かにつけてコーチを買って出た。代表候補生と言うだけあって優秀で、俺はイマイチだが一緒に指導を受けている秋二はメキメキ腕を上げていた。

「そう言うもんか…」

それにしても、セシリアとこども仲良くなれるとは思わなかったな。どういう心境の変化か、最初のころの態度が嘘のようだ。

「後は慣れるしかないよ」

「もし分からないようでしたら、また放課後に指導して差し上げますわ。その時はふたりっき」

『織斑兄弟、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ』

セシリアの言葉をさえぎる形で千冬姉への指示が入る。

「……了解です。では一夏さん。お先に」

「じゃ、俺もお先」

言つて二人は地上へ向かつて急降下。その姿はぐんぐん小さくなつてやがて地上で停止した。千冬姉えに注意されているところを見ると秋二は何か失敗したらしい。セシリアはパーフェクトみたいだ。「うまいもんだなあ。よおし……」

機体を下方向へ傾けて。“ジェット機が飛ぶ”感じだったな。こ
うジェット機のエンジンをイメージして…加速！

ボツ！！ ギユウウンツ！！！！

つて速ツ！？ 地面近ツ！？

「うあわああああ！！？？」

「へ？？」

ちゅどオオオん！！！！

しつかり着地した。ちゃんと頭から地に着いたぞ。これは専門的に言えば“墜落”というらしい。

みんなクスクス笑わないで。俺のライフはもうゼロだから。

「がはあッ！！ はああ…死ぬかと思つた…」

落下の衝撃で出来上がった小さなクレーターの淵に手をかけやつ
との思いで顔を出す。

「情けないぞ、一夏。ほら」

「サンキュ。箒」

箒が差し伸べてくれた手を取って這い上がる。そうするなり箒は小言を言ってきた。

「まったく。昨日あれほど教えてやったというのにお前は」

「一夏さん、お怪我はありませんか？」

「お、おう。セシリア、痛いところもないし大丈夫だぜ？」

俺と箒の間に割って入ったセシリアは心配そうに顔を覗きこんでくる。

「何をべたべたと。ISを身に付けて怪我をするはずなかるう」

「篠ノ之さん。相手を気遣うのは当然でしょ？」

「ふんっ。この猫かぶりめ」

「ほほほ。鬼の皮よりはマシですわ」

なんか二人の間に火花が見える。最近こんなやり取りが多いんだよな。二人とも仲良くしようぜ。でも『喧嘩するほど仲がいい』とも言うからなあ。うーむ。

「あれ？秋二は？」

あたりを見回してもその姿はない。さっきはいたはずなのに、どこ行った？

「あの……」

いまだ土煙の晴れないクレーターの中心から蚊の鳴くような声が俺たちの耳に届いた。

「俺の心配は……なしですか……」

「「「あ……」」」

……ガクツ。

へんじがない。ただのしかばねのようだ。

「死ぬな秋二い！！！」

「おつおお医者様は！？ お医者様はどちら！？」

「その前に担架だ、担架ア！！！」

「みなさん落ち着いて！落ち着いて〜！」

白目をむいて気絶した秋二に大慌て。山田先生までてんやわんやになる始末だ。

「何をやっているんだ。おまえたちは……」

千冬姉えのため息はドタバタし始めたクラスの喧騒に飲まれて消

えた。

この一件が織斑秋二の受難、いや、女難の日々の幕開けに過ぎなかったことは、言うまでもない。

時は夕刻。IS学園校門前。そこに掲げられた校章を見上げる少女が一人。

「此処がそうなんだ…」

猫を思わせる目は細められ、金の髪留めで結い上げた黒色のツインテールを風が撫でる。その口元に笑みを浮かべながら門をくぐり、

足早に校舎を目指していく。

「フフフ…待ってなさいよ」

第七話 騒々しい日々の幕開け（後書き）

バトル抜きの日常回。秋二がちゅどーん。多分これからもこんな感じかと。

最後にチラッとあの子が登場。彼女の登場でどうなる事やら。

ではまた次回へ。

第八話 転校生はセカンド幼なじみ

「おはよー。一夏くん、秋二くん。二組の転校生の話。聞いた？」

「転校生？こんな時期にか？」

「へー。テストとか難しいのにな」

朝。教室に入るなりクラスメイトに織斑兄弟は話しかけられた。入学から早二週間、一夏も秋二も普通に女子と喋れるくらいに馴染んでいた。

「なんでも、中国の代表候補生らしいよ」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転校かしら？」

とは、一組のイギリス代表候補生セシリア・オルコットの言である。本日も腰に手をあてたポーズが様になる。

「このクラスに来るわけでもないんだ。そう騒ぐことでもあるまい。それより一夏。お前は二週間後の対抗戦に集中するべきだろう？」

「そりゃ、まあな……」

篝の言葉に自信なさげに答える一夏。転校生のことは気になる。しかし、己の実力も含め、先日グラウンドに大穴をあけると言う珍事を、弟ペチャンコのオマケつきでやらかした身として強く言えないのだ。

「とにもかくにも、対抗戦がんばってね」

「いっちー、ファイト一発！」

「織斑くんが勝つとみんなハッピーだよ！」

クラスメイトから贈られるエール。それには理由があった。

生徒のやる気を引き上げるためにと対抗戦には賞品が用意される。今年の優勝賞品は学食デザートの半年フリーパス。このフリーパスがあれば好きなデザートにあり付ける。

IS学園の学食は定番メニューから留学生のために世界各国の料理まで揃っていて、ちょっとしたレストランよりもおいしいこと有名だ。デザートに関しても言わずもがな。

「うんうん。一夏が勝てばデザート食べ放題だ。フフフフ…」

甘味・スイーツが大好きな秋二はそれにすっかり御執心だ。

「お前いつも食べてるくせに。ホント甘いもの好きだな」

「当たり前だろ。食べてあんなに幸せになれる物は、他にない」

「いいですわね。殿方はダイエットを気にせずに済んで」

「そういうことは勝ってから話すものだろう。“獲らぬ狸”だぞ」

「でも篠ノ之さん。専用機持ちのクラス代表って一組と四組だけなんだよ。これなら余裕でしょ」

「その情報、古いよ！」

いきなり開いたドアから威勢のいい声が飛び込んできた。

第八話↳転校生はセカンド幼なじみ↳

教室のドアからふと声が聞こえた。織斑兄弟にしてみればかなり聞き慣れた声。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「「鈴^{リン}!?!」」

髪をツインテールに結び上げ、金の髪飾りで留めている細身で小柄な女の子。制服は彼女らしく肩にスリットが入れてあり、動きやすいようにしてある。

「そうよ。中国代表候補生、鳳^{フマゼンイン}鈴音。今日は織斑一夏に宣戦布告しに来たってわけ!」

ビシッと双子を指しトレードマークのツインテールが揺れる。これを見て双子が考えたことは一つ。

「……秋二。鈴のやつ、何でかつこつけてるんだ?」

「知らないのかい?あれを俗に言う“高校デビュー”って言うんだ!」

久しぶりに会った顔なじみをいじり倒すことだ。

瞬

鋭い踏み込み、繰り出される拳は一夏と秋二の鳩尾^{みぞおち}を的確に捉える。

ズドドン!!

実際にこのような衝撃音は人体から出ません。決して真似しないでください。

「人をボケに使うじゃないわよ！ このバカ双子！！」

「ゲフ…久々の…ボケ殺し…」

「おえつぶ……」

なんと素敵な嘔吐感。一夏と秋二は鈴のグーパンチがクリティカルヒットした鳩尾を押さえて悶絶した。まさに『口は災いの元』。

「挨拶もないそっちが悪いのよ。せつかくの再会が台無しじゃないまったく」

「あー悪い、悪い。久しぶり鈴」

「ふんつ。最初からそうしなさい…よっ！」

一夏はなんとかダメージから回復して鈴と右手でパンっとハイタッチ。続いて鈴は一夏の隣で机を支えにしている秋二を覗きこんだ。

「鈴、元気そうで何より…」

「当然よ。で、アンタ元気になったのよね？」

「うん。お陰さまでこの通り」

「だったら連絡の一つも寄こしなさい！」

頭を小脇に抱え込んで拳骨をグリグリグリグリグリグリグリグリグリグリグリグリグリグリ。

これぞ鳳鈴音の十八番・グリグリの刑。握り拳の一番硬い所でやるからこれがまた痛い。頭を抑え込んで首に体重をかけてくるから尚更だ。

「痛いよ、鈴。ギブギブ」

「痛いのは元気な証拠よ。バカ」

タップできる余裕があるので今回は軽めのようなのだ。

「もうHRホームルームの時間だぞ。教室内で何をじゃれている？」

「あ…千冬さん。どうもお久しぶりです…」

我らが鬼教官・織斑千冬の登場に鈴は、パツと秋二から離れてかしまる。実のところ言えば彼女は千冬の手厳しい所が若干苦手だったりする。

「ああ、久しいな鳳。悪いが時間だ、早く教室に戻れ。それと学校

では織斑先生だ」

「はい、失礼します織斑先生。一夏、秋二。昼休み空けときなさいよ！食堂に集合だからね！」

千冬に言われるなり、鈴はぴゅくと効果音付きで二組に戻って行った。もちろん一夏たちの返事は聞いてない。

「お前たちも席につけ、HRを始めるぞ」

「「「「「はいっ」「」「」「」

突っ立っていた生徒一同は出席簿が振り下ろされる前に席についた。最近になってクラス全体の出席簿被弾率が低下してきた。これも日々の学習の賜物。

ちなみに、このクラスで最も被弾している彼は

（なんかなあ、ビシツとしてる千冬姉えって違和感あるんだよな。秋二につまみ食い怒られたり、お菓子とか酒の肴とかをねだったりしてるところからは想像がつかない。そう言えば、ちゃんと洗濯してるのかな？いい加減、下着くらいは自分でネットに入れてほしいぜ。我らが担任。今年で二十四歳になるってのに）

「お前、今何か無礼なこと考えなかったか？」

「ソナナコトナイデスヨ？」

「ぱーん！」

相変わらず見事な叩かれっぷりである。

（何だと言うのだ。さっきのやつは！一夏と親しそうにして……。まるで幼なじみに再会した様な……。まったく、幼なじみは私だろう！）

箒は先程の女子の登場に揺れていた。鳳鈴音と名乗ったあの少女は、秋二の思い出話に出てきた少女によく似ている。

（ふむ…仮に鳳が一夏を好きだったとして、だ。私は幼なじみしかも同室。これは揺るがん。二人きりなることはいくらでもできる）

箒は脳をフル回転させ今晚は一夏とどう過ごすかと言う課題をこなした。

（それに、ずいぶんと秋二と仲が良さそうだったな。あの様子だと鳳は秋二に気があるかもしれん。どの道、敵ではないな。大丈夫だ。）

「篠ノ之。問一の答えは？」

「…は、はいっ！え…と、すみません聞いていませんでした…」
ばしーん！

（なんなんですよ、さっきの方は！ただでさえ箒さんがいると言っ
のに。あの方まで“幼なじみ”なのかしら？だとするならばまずい、
非常にまずいですわ）

セシリアは顔をしかめる。彼女としてはこれ以上難敵増えられて
は困る。いくら他の女子よりも一夏と近いと言っても、箒のような
“幼なじみ”と言われる間柄程、心の距離が近いわけではない。

（代表候補生と言っていましたわ。専用機を持っているということ
は…。これは由々しき事態ですわ）

それは箒になくてセシリアが持っているアドバンテージ。手続き
や整備に時間がかかる訓練機より専用機持ちである自分の方が一夏
を気軽に訓練や模擬戦に誘えるのだ。

（秋二さんとも親しいようですし、やはり外堀をしつかりと埋めて
から…。いいえ、一夏さんにわたくしを意識していただくには、も
っとストレートで決定的な方法が…）

「オルコット、97ページの…」

「…例えばデートに誘うとか、いえ、もっと効果的な…」

ばしーん！

「お前のせいだぞー！」

「あなたのせいですわー！」

「何がなんでだよ……」

昼休み。さて食堂に行こうかと席を立つ一夏の前に箒とセシリアが現れた。

午前中だけで彼女たちはそれぞれ千冬による出席簿チェックを五回、滅多に怒らない真耶から注意を三回も頂戴した。一夏とて、その原因が自分にあるとはゆめゆめ思っまい。

「まあまあ、話はメシ食いながら聞くから。とりあえず食堂に行こうぜ。」

「ふんっ。鳳とかいうやつ、言った通りにしなくてもよかるっ」

「行かないとへそ曲げるんだよ。あいつ」

ついでに一夏のいろんなところがひん曲がる。これがまた冗談ではない。

二人の気が収まった所で、数名のクラスメイト共に食堂へ移動した。

「待つてたわよ！」

食堂の入り口で、どーんと腕組み仁王立ちをしている鈴。これはチャンスと秋二が口を開き、一夏が乗る。

「だいひょうこうほせいのリンインが
しょうぶをしかけてきた！」

「Aポチッ」

「だいひょうこうほせいのリンインは
アイエスをくりだした！」

「もう一回ポチッとな」

「マジで出す？」

「「サーセン」」

鈴の右拳が装甲板に覆われているのは見間違いではない。毎度毎度茶化して痛い目を見ているのに懲りない兄弟である。

「ぶざけてないで、さっさと食券買って席行くわよ」

「「はい」」

一夏たちは鈴の後について券売機まで行ってそれぞれ食券を買った。一夏と秋二のメニューは日替わりランチ。毎日違うものをリーズナブルに。実にいいことだ。

箸はきつねうどん、セシリアは洋食ランチをそれぞれ購入。食堂のおばちゃんたちに“いつもの”と、言えば通じるくらいに毎日同じものを頼んでいる。

「そういえば一年ぶりぐらいか？どうして連絡くれなかったんだよ」

「それじゃ感動の再会にならないじゃない。ま、関係なかったけど……」

「すまん。悪かった」

ジト目でにらむ鈴に、一夏は平謝り。これ以上機嫌を悪くされたらたまれない。

それぞれが品物を受け取ると一緒の席に着いた。いただきますと手を合わせると、ラーメン啜りながら鈴は双子に質問を浴びせてきた。

「あんたたち、なんでES使ってるのよ？ニュースで見たときびつくりしたじゃない」

「それは、今更話すとバカらしいんだけど…二月の私立高の受験の時に」

秋二が事の顛末を鈴に説明し始めた。ちなみにこの話、ある者は呆れ、またある者は驚く。

「　　と言つわけで俺たちはここにいるんだ」

「ぷっはは！じゃあ何？間違い電話に勘違いってわけ！？　アハハハ！！！」

「うるせえな。こつちだつて結構恥ずかしいんだよ」

鈴にして見れば爆笑ものだ。“世界初・男性ISパイロット誕生秘話”が間違い電話からのスタートという出落ちには笑うしかない。

「一夏っ！そろそろ説明してもらっぞ！」

「そうですね！一夏さんはこの方とっ、つき合っていらっしゃるの！？」

バン！と机を叩いてずいっと身を乗り出してきた篤とセシリア。
「不機嫌です」と読めるくらいに顔に書いてある。

「ねえ、秋二。この二人ってコイツに？」

「当たり前。さすがだね」

皆まで言わずとも。こそこそと短いやり取りで鈴は状況を理解した。自分は勘違いされている。デカ乳ポニテ娘とパツキンロール欧米女に。男女の仲的な意味で。

(いちいち説明すんのが面倒なのよね)

鈴は一夏、秋二の一番の女友達だ。そのお陰(主に一夏のせい)で言いがかりをつけられることは幾度なくあった。鈴はかねがね「気にせず告ればいいじゃない」と思っている。

「別につき合っていないわよ」

しかし、面倒でも言わなければ伝わらない。次は行動で“一夏に気が無い”ことを示さなければならぬ。これが彼女の経験則だ。

「ああ、こいつは幼なじみだよ。」

一夏も乗っかり真顔でさらり。この返答はふたりの心に立ち込めていた暗雲を振り払った。

（よかった。つき合っていないのか。そうか、そうか。ならば）

（わたくしとしたことが、仲がよろしいからてつきり……。でしたら）

視線が交錯し、火花が舞い散る。

（（ 敵は一人！！ ））

何故だろうか、メラメラと燃える炎まで見える。

聞くことだけ聞いて二人の世界に突入した箒とセシリアに、一応と秋二が声をかける。

「えーと、紹介がまだだったね。俺たちがよく行つてた中華料理屋の娘さんで鳳鈴音さん。箒ちゃんと入れ違いで転校して来たんだ。で、こちらは篠ノ之箒さん。前に話した剣術道場の子だよ」

「言うなれば、箒が“ファースト幼なじみ”で鈴は“セカンド幼なじみ”ってとこだな」

しん……。幼なじみに一番も二番も無いのだから言わなくていい。

「んんっ！！こいつらから話は聞いてるわ。あたしは鳳鈴音。改めてよろしくね」

「ああ。篠ノ之箒だ。こちらこそ、よろしくな」

「それから、俺たちの訓練を手伝ってくれる」

「イギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ。お互いに、未来の^{ライバル}国家代表になれるよう、頑張りましょう」

「その辺はどうなるか分からないけどね。ま、よろしく」

キーンコーンカーンコーン

女性陣がそれぞれ握手を交わした所で予鈴が鳴った。これは五分钟后に午後の授業が始まることを意味する。随分と話し込んでいたらしい、見れば食堂にはほとんど人が残っていないではないか。
一夏たちは全速力で残りの昼ご飯を片付けにかかる。

「じゃ、お先！」

ラーメンのスープを一気に飲み干し、いち早く鈴が席を立った。

「あ、ちよつと待った、鈴」

「…つと、なによ！？」

「放課後、一緒に訓練やらないか。専用機持ち同士でやった方が効

率いいだろ？」

一夏は数日前、セシリアに“専用機持ち同士の訓練の意義”についてたっぷり説明してもらったのだ。それにかこつけた口実なのだが。

「アンタねえ、対抗戦で戦うのに一緒に訓練してどうすんの？手の内見せることになるのよ」

「あ、そりゃそうだな」

「あたしはあたしでやるから大丈夫。その放課後訓練ってやつが終わったところに遊びに行くから。じゃね」

「おう」

一夏は軽く手を振って鈴を送り出した。

ガタツ！×3

「お先〜」

「先に行くぞ」

「お先に失礼します」

「ゲツ。早！」

三人は席を立つと一夏に一声かけて小走りに行ってしまった。この後の授業は千冬が担当なので遅れれば恒例の出席簿が待っている。無情にも一夏が最後のご飯一口を味噌汁で流し込んだ所でチャイムが鳴った。

「で、何故遅れた？」

「喋ってたら昼飯食つのが遅くなりました」

ゴスツ！！！！

「席につけ」

「はい……」

本日初の角^{かど}、いただきました。

第八話 転校生はセカンド幼なじみ（後書き）

鈴ちゃんのポジションは女友達に変更。賛否両論かもしれませんが。

今回の話は二回ほど書きなおしました。惚れてない 惚れてる 惚れてないって感じで。ただでさえ遅いのさらに遅くなってしまいました。

鈴ちゃんマジいい女を目指してがんばります。

対抗戦までもう一話。

ではまた次回！

第九話 国の思惑って怖いよねの巻

夕飯を終えてまったりタイムの午後八時。1025号室の扉が勢い良く開かれた。

「遊びに来たわよー!!」

「……………」(死ーん)

「ねえ、どうしたの?この二人」

鈴の視線の先には椅子に座り、真っ白に燃え尽きている一夏がいた。秋二に至っては口から何か出てきている。

「うむ……。少々訓練をきつくし過ぎたらしい」

篝の言う、本日の訓練内容は

「一夏!何を見ている。お前も参加しないか!」

「そうですね。黙って見ているも身につきませんのよ!」

「いやいやいや、お前らどっちかに味方したら怒るだろ!」

「当然だ!!」「当然ですわ!!」

「シユミレーター準備できたヤ
カ！こつち来んなああ！！」
「助けてー！！」
ちよつバ

ざっくり流れを要約すると、箒が訓練機『打鉄』を持ちだし、セシリアと模擬戦に発展し、一夏が秋二に助けを求め、待ったなしの時間無制限2on2バトル、と言う感じである。

(うわあ、断つてよかったわ)

鈴はそんな双子に同情しつつ、促されるまま箒のベッドに腰を据えるのであった。

第九話 国の思惑って怖いよねの巻

「せっかく来てもらったのに悪いな。ほい」

再起動した一夏は鈴にお茶の注がれたマグカップを手渡した。

「ん、ありがとう。別にいいけど、毎日こんなになるまで訓練してるわけ？」

「いや、そう言うわけじゃないんだけどな。ただ……」

一夏がチラと篝の方へ視線を投げると鈴は「ああ」とうなずいた。傾向として篝・セシリアの機嫌に応じて訓練の密度と過酷さが変わる。今日は特にご機嫌ナナメだったので以下略。

「それにしても、ここでもいい具合に面白いことになってたのね」

「面白かねえよ。何が楽しくて移動のたびに大名行列を作らなきゃならいんだ。トイレは遠いし、風呂にも入れないしよお」

一夏の愚痴はウソのようなホントの話。女子校に男子というラブコメ鉄板ネタの面白い状況は当事者から見ればかなり酷な環境のようだ。否応なく注目される。必要以上に気を使わなければならない。

もし何事があれば警察沙汰かもしれない。おまけに望んでもいないのにアイドル顔負けの“取り巻き”や“おっかけ”がついてしまった（二人はイケメンです）。

「仕方なかつた。ここの女子は男に免疫がないのだ。」

篤の言うようにIS学園の女生徒たちは男性とかなり縁遠い生活を送っている。人によっては入学の以前から。そんな環境下で男が二人現れた。当然興味がわく訳で、“あわよくば”と考えるのは人情だ（くどいようですがふたりはイケメンです）。

「だからってなあ。休み時間のたびに教室に来られるのは勘弁だぜ」

「我慢しなさいな。今のアンタたちは世界中から注目されてるんだから」

「なあに、どうせ熱が冷めれば元通りだ。一組の皆がそうだろう？」

ちなみに、一組のメンツが男子二名（主に一夏）にアプローチをかけない理由は篠ノ之篤じゆんのかほとセシリア・オルコットにある。

「早く……そうなつてくれれば、いい、けどね」

秋二はもたれかかっていた椅子からのっそりと立ち上がった。

「お、ようやく復活か。て、大丈夫か？なんか顔色悪いぞ」

「うん、ダメ」

秋二は会話になつていない会話をし、ふらふらと空いている方の

ベッドに倒れ込んだ。

「おいおい、俺のベッドで寝るなよ」

「気をつけまーす」

秋二は仰向けになり右手を挙げる。すると鈴がひょいと対岸の一夏のベッドに腰と移し、秋二の顔を覗きこむ。

「相変わらず体力ないのね。筋肉痛は当然として、明日はお熱？それとも下痢かしら？」

「鈴ちゃんヒドイ」

ひどいかもしれないが鈴は事実しか言っていない。秋二は体育祭・マラソン大会などの各種運動系学校行事の後、鈴の言う体調不慮を訴えて学校を休むことがしょっちゅうだった。これは秋二が運動神経のよろしい一夏と張り合い、全力でもって事にあたった結果。兄弟ともども運動の成績は常に上位、しかしその片方は運動の翌日にぶっ倒れるという図式が同級生および担任教師の共通認識になるほどであった。

「なあ、鈴。お前さ、世界中から俺たちが注目されてるって言ったよな。どういうことだよ？今ところIS動かしたってこと以外、目立つことやってないぜ？」

そう言えばと疑問を口にする一夏。他三名は顔を見合わせると深いため息をついた。

「どっつてごう、無頓着なんだ。お前は」

「一夏。ニュース見たかい？」

「仕方ないわね。ほら、これ見て」

鈴は自分のタッチパネル式携帯を操作すると画面を一夏に向けた。

一夏は示されたニュースサイトに目を通していく。

「なになに？帰属問題で紛糾、IS委員会・臨時総会？」

「要するに、アンタたちの国籍をどこにするかでIS保有国が揉めてんのよ」

「はあ！？俺たちは日本人だぜ？どうしてこんなこと」

「だーから、アンタたちは世界のお役人から見ればこの上なく欲しい人材なのよ。あんたたちを研究すれば他の男もISが使えるようになるかもしれないでしょ。他にも、プロパガンダの材料とかにもなるし」

「……………マジ？」

「きっとマジだろうね。国籍を政府の都合で書き換えるとか、訳ないだろうし」

腹黒い思惑が自分たちに絡んでいると分かると一夏の顔が徐々に引きつっていく。

「まあ。今のところは学園卒業の後、本人の自由意思に任せると言う形でまとまっているみたいだな」

鈴から携帯を借り、サイトを見終えた筈が現状の委員会の決定を口にした。

「そう。それがまた問題なのよね」

「どついうことだ？これなら一夏も秋二も自分の意思で選択が出来るはずだろう」

「選べるってことは、選ばせることだってできるのよ。これがあたしの本当の転校理由」

「「「??」」」

“ 第三世代機の運用とデータ収集、操縦者の高度な技術習得” が鈴の転校の理由と聞いていたので一夏たちはは首を捻る。

「ウチの役人連中にはコレになれば尻尾振って付いてくると思ってるヤツがいんのよ」

特に女のね、と鈴は心底嫌そうに左の小指を立てた。

「うわあ、性質悪い」

「国が一枚噛んでるとは言え、色仕掛けか。俺たちって好色に見えるのかなあ」

「同じ女として恥ずかしい…」

三人は中国の陰謀にドン引き。あなたが好きよ、と言って近づい

てくる女生徒は実は国の命令で動いていて、口説き落とせばしめたモノ。恋人と離れ離れになりたくないの、だから祖国までついて来て、と。

「ホントだわ。こんなバカげたこと考えるくらいなら、もっと真つ当な方法でやれっつての！」

そこからは鈴の不満が大噴出。

政府のお役人様が鈴の経歴を調べ上げ、織斑兄弟と接点があったことに目をつけた。後はあれよあれよという間に他の代表候補生を押しつけてIS学園の留学生枠に推薦された。一度は自分以外に適任者がいると突っぱねるも上からの圧力で遅ればせながら転入という運びになった、とのこと。

「あたしより強い人だっていたのに何考えてんだか」

織斑兄弟はイライラと愚痴る鈴に若干の危機感を覚えた。この調子で矛先が自分たちに向いたら、たまったものではない。

「あー、そうだ。そういやさ、おじさんとおばさんって元気か？」

とりあえず話題を変えようと一夏は家族の話を振った。一夏と秋二は鈴の両親が経営していた中華料理店によくご飯を食べに行っていた。自分たちのことを可愛がってくれたし、ごちそうになっていたから鈴の両親のことは良く覚えているのだ。

「母さんは元気よ。父さんは多分元気……だと思っ」

当たり前障りのない話だろうと一夏は思っていたが、言われた瞬間、ふっと鈴の顔が陰った。

「それよりさ、今度みんな誘ってどこか遊びに行かない？ 駅前のシヨッピングモール、完成したんでしょ？」

「お、おう。いいぜ。ただ対抗戦終わってからな。授業と訓練で力ツカツだし」

パツといつもの調子で提案する鈴に違和感を覚えつつ一夏は返事をした。

「オツケー。それじゃあ時間も時間だしお暇するわ。あ、あと途中から愚痴になっちゃたけどさ。帰属の話も含めてあんた達に悪意を持って接してくる輩は必ずいる。気を付けなさいよ。あたしみたいに味方できる人間ばかりじゃないからね」

「サンキユ。気をつける」

「わざわざありがとね。鈴」

「別にお礼なんていいわよ。お節介みたいなもんなんだから。じゃ、また明日」

面と向かってお礼を言われて気恥しくなった鈴はパタパタと足早に一夏たちの部屋を後にした。

「……ふむ。地雷踏んだね。一夏」

秋二も鈴の様子を見逃さなかった。言われるまでもなく一夏も家族がらみの問題が鈴にあると、理解できた。

「わかってるよ。わざわざ言うな。で、お前そのまま俺のベッドで寝る気か？」

秋二は返事の代わりに自室の鍵を一夏に放って寄こした。

「悪いね。ちょっと動けそうにない」

「仕方ないな。早めに起きろよ」

「了解です。お休み」

一夏が部屋を出て、二人きりになった秋二と篤。

「さて、篤ちゃん。ちょっと聞きたいことがあるんだけど。いいかな」

「なんだ」

「ぶつちやけ一夏とどこまでイッた？」

「ぶつ！！ なんな何を言うかあ！？」

「そんな盛大に吹かなくても。相部屋なんだからさあ。アタックチヤンスはいくらでもあったでしょ？」

「あ、あるわけ無かるう。そんなはしたないことはわたしから……」
「によによ」

何を想像したのか箒は真っ赤になって小声になってしまった。

男女相部屋で手を出さない一夏も素晴らしい鉄の理性だが、意中の相手がすぐそばにいとつものにも進展させない箒も箒だ。

(この調子じゃ先は長いだろうな)

鈍感と初心。この組み合わせでゴールインはいつになるやら。内心で一夏と箒が一緒になってくれれば安心できると思っている秋二はため息をひとつ。そして意識をまどろみの中へ手放した。

クラス対抗戦を数日後に控えたある日。一組担任である千冬から
思わぬ提案があった。

「織斑兄。今日の放課後は空いているか？」

「空いてないですね。いつもの面子で訓練があるんで」

「そうか。それなら、みんなつれて第一アリーナに來い。対抗戦に
向けて一つ稽古をつけてやる。遅れるなよ」

「わかりました」

千冬の指示通りに放課後、第一アリーナに集まった一同は驚愕に包まれていた。

「なあ秋二。あの機体って、もしかして……」

「“暮桜”！？ どうして??」

紺碧に淡い色の桜模様。甲冑具足にも似たシルエットの装甲を身に付けた姉・千冬がそこに佇んでいる。

「なんだ？ ISの訓練でISを使うのがそんなにおかしいのか？」

「いや、そう言うわけじゃないです」

剣一本でIS競技の世界大会“モンドグロツソ”第一回優勝まで駆け上がった世界最強乗り手が、零落白夜の本家本元である愛機を携えてが目の前にいる。驚くのも当然だ。

「篠ノ之も打鉄を持って来たか。ちょうどいい。まずは模擬戦をやって全員の実力を見てやる。まとめて来い」

千冬は愛刀『雪片』を抜き払い、正眼に構える。だが、生徒四人は動く気配がない。

「ん、どうした？ アリーナの使用時間は限られているんだ早くしろ」

「織斑先生。お言葉ですが四対一で実力を見ると言うのはいささか無茶が過ぎるか。それに暮桜は第一世代機ですし……」

「数と世代差など問題にはならないさ。お前たちが束ひょうりになったところで負ける気はない。さっさと構えろ」

セシリアの言葉にも余裕を見せる千冬。しかし、その目には宿る光はれっきとした戦士のそれだ。

「はあ……仕方ないね。配置は1-2-1、俺、一夏と箒ちゃん、セシリアさんの順で。俺が前に出て防御。一夏と箒ちゃんは前衛担当。セシリアさんは援護よろしく」

やるしかないと思つた秋二は各人に指示を出す。それぞれが配置につき、武器を構えた。

「それじゃあ、いきます。先生」

「お前は馬鹿か？織斑兄。胸を貸すほど私は甘くないぞ」

『雪片式型』を握る手に一層の力を込めた一夏に千冬は笑顔で言う。本気で来いと。

「行くぞみんなー!!」

「もちろん!!」「応!!」「はい!!」

「そつだ、その意気だ。来い!!」

そして、時は流れてクラス対抗戦^{リーグマッチ}当日。

トーナメント第一試合 一組代表・織斑一夏VS二組代表・鳳
鈴音

今、激闘の火蓋が切って落とされる。

第九話 国の思惑って怖いよねの巻（後書き）

ついに迎えたクラス対抗戦。

相對する一夏と鈴。

そこに思わぬ乱入者が現れる。

次回『熱闘！激闘！クラスリーグマッチ』

草かんむりの“萌え”も大事だけど、ファイヤーバーニングの“燃え”も大事だよね！

と、のたまってみる（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7441q/>

IS インフィニット・ストラトス 無限の空へ

2011年10月8日18時15分発行